

---

# ネギま！太陽の戦士

葉月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ネギま！太陽の戦士

### 【Nコード】

N0215Y

### 【作者名】

葉月

### 【あらすじ】

- 神奈川県川崎市で繰り広げられる壮絶な善と悪の戦い -  
天体戦士サンレッドと、悪の組織フロシャイム川崎支部ヴァンプ將軍。

幾たびの激闘により築かれた、友好的な敵対関係（ヴァンプ談）  
そんな二人が、バイクでツーリング中に謎の発光現象が！  
二人が目覚めるとそこは神奈川県川崎市ではなく埼玉県麻帆良市！？

常に全力を出すことが出来なかったヒーローは、己が力を存分に振るい、白き翼を照らす太陽となる！

天体戦士サンレッドと魔法先生ネギま！のクロスオーバーです。

苦手な方はお気をつけください。

処女作ですので拙く、誤字脱字も多いと思いますが、よろしければ見てやってくださいませ。

## プロローグ（前書き）

初めまして！

皆さんの小説読んで触発されて、勢いのまま書いた駄文。処女作品ですので至らないことが多々あると思います。

それでも駄文なりにがんばっていきたいとおもいます！

よろしくお願いします！

## プロローグ

神奈川県川崎市のとあるマンション

ピンポン・・・

「おい、かよ子？誰か来たぞー？」

リビングで寝転がってテレビを見ている男性は動こうとはしない。

「はい！」

奥から呼ばれた女性・・・かよ子が応対の為、玄関に向かう。

戻って来たかよ子と来客の話し声。

「いつも助かります。ヴァンプさん。」

「いいのいいの、気にしないで！たくさん作ったほうが美味しいからね、お料理は。」

来客は、おすそ分けを持って現れたヴァンプ將軍。

言動はただの主夫だが、それでも世界征服を企む悪の組織フロシャイムの幹部である。

「まあ、たお前かよ、ヴァンプ。ホント、気軽に来るよなお前は・・・。」

「ちょっとアンタツ！折角おすそ分け持って来てくれたヴァンプさんにまたそんなこと言って！」

「まあまあ、かよ子さん。レッドさんも本気じゃありませんよ。ね？レッドさん。」

「勝手に言ってる！」

この悪態ついてる男性こそ・・・、天体戦士サンレッド。  
神奈川県川崎市で日夜、世界征服を企む悪の組織フロシャイムと戦  
い続けるヒーローなのだ！！

たとえ働きもせず、彼女のかよ子に養われているヒ　であつても！  
そう！　モであつても！ヒーローなのだ！！

たとえ悪の組織の幹部がおすそ分けに来るほど近所付き合いがあ  
るうとも！ヒーローなのだ！！

かよ子とヴァンプが世間話で盛り上がってからしばらくすると、再  
び来客を告げるチャイムが鳴った。

ピンポン・・・

「あ、今度こそ来たかも！」  
嬉しそうに玄関に向かうかよ子。

「何が来たんだよ？」  
「？」

一方、訳が判らないレッドとヴァンプ。

しばらくしてかよ子が戻ってきた。しかも満面の笑みで。  
ますます訳の判らない二人。

「うふふ、二人とも着いてらっしゃい」  
「「？」」「」

かよ子に促され、外に出てきた二人の目の前にあつたのは一台の赤  
を基調としたレーザータイプバイクだった。

「お前っ！これっ！どーしたんだよ！？」  
動揺するレッド。

それもその筈。

このバイクは以前、金に困ったレッドが中古屋に売りに出したヒーロー用バイクだった。

「アイツら（フロシャイム）相手に必要ねーから。」とはレッドの言葉。

「ふふっ、中古屋さんに出てたから買ったのよ。アンタにプレゼントしたげようと思って。」

「凄いじゃないですか！レッドさん！」

ヴァンプとしては、ヒーローらしく対決に登場したりしてくれるのでは？

と、期待が高まるばかりである。

正直、かなり望みは薄いのだが・・・。

「アンタ、ヒーローなんだから、乗り物のひとつでも持っていないと格好つかないでしょ？」

「そうですよ。ささ！早速乗ってみせてくださいよぉ。」

「・・・なんでデメエに見せなきゃなんないんだよ・・・。」

「別にいいじゃないの。アンタ、前にヴァンプさんの新品の自転車失くしてるじゃない。お詫びに後ろに乗せてあげてもいいくらいよ？」

かよ子の言うとおりレッドは以前、ヴァンプの電動式自転車を紛失したことがあるので（翌日に取り戻したが）それを言われると負い目も相まって、強く出れない。

「・・・ちっ、わかったよ！後ろに乗つけてやりゃいいんだろ！乗

っけりゃ！」

本当はかよ子を乗せてやりたかったレッド。

しかし当の本人から言われてしまったのだから、もうヤケクソである。

「おら、来いよヴァンプ！」

レッドとしては慣らし運転も兼ねて借りも返して、さっさと終わらせてしまいたい。

と、気持ちを切り替え、久しぶりのバイクに跨った。

「えゝ、悪いですよゝ。」

口では遠慮してるものの、興味深々のヴァンプ。

「いいから早く来いってんだっ！」

「ひいっ！！すぐ乗りますゝ！！！」

慌てて後ろに乗り込むヴァンプ。

「気をつけていってらっしゃい。あんまり危ない運転しちやダメよ？」

「おー、わかってるって。じゃ、いつてくるわ。」

「いつてきます、かよ子さん。」

レッドがバイクを起動させる。

持ち主の所に帰って来た、ヒーロー用のモンスターマシンが喜びを表すかの如く唸りをあげる。

ヴオオオオオオンッ！！オオオオンッ！！

颯爽と去っていくレッド達。



「プレゼントしてよかったわ あんなに嬉しそうにしちゃって  
ご機嫌なかよ子であった。」

ギヤオオオオオツツ・・・！！！！

颯爽と風を切る一台のバイク。言うまでも無くレッド達である。  
既に法定速度なんて無視である。

「ち、ちよつと、レッドさん!？」

「ゝゝ」

鼻歌交じりで反応がない。ご機嫌である。

「レ、レッドさん!？レッドさん!？」

「ゝ・・・ちつ、んだよ？ヴァンプ。」

「慣らし運転じゃないんですか!？」

初めてのバイク、初めてのスピードにヴァンプはもう楽しむ余裕な  
んがなく、恐怖でいっぱいである。

「スピード出さなきゃ楽しくねえじゃねゝかよ。」

そう言いながら更にスピードをあげるレッド。

「ひいひい!？・・・ん？」

スピード計を見ようと覗き込むと、ハンドル中央にチカチカと点滅  
するボタンを見つけたヴァンプ。

「レッドさん、そのスイッチは？点滅してますけど・・・。」

「あん？これか？これはゝ・・・なんだっけ？ま、押してみりゃわ  
かるか。」

ポチッ

バイク、そして搭乗しているレッドとヴァンプが赤い光とスパークに包まれ始める。

バチッ・・・！バチバチッ・・・！！  
ピカアアアアア！！

「あれ・・・？」

「え？ち、ちよつと！？レッドさん・・・」

そして、一際激しい閃光！

ピカッ！！！！

赤い閃光が収まると・・・

二人の姿は何処にもなかった・・・。

これが運命の始まり。

交わることのなかった二つの世界。

全力を振るえない正義のヒーローと、英雄の遺児。

白き翼が太陽の加護を得た時、運命の歯車が回り始める。

## ブローグ（後書き）

投稿が予想よりも遥かに恥ずかしい!!

11/1修正

## F i g h t . 0 1 ( 前 書 き )

続けて投稿。

作成スピードがあがらない！orz

## F i g h t . 0 1

「う．．．、うん．．．。」

倒れていた男性が目を覚ました様だ。

その男性は起き上がるとすぐさま、自身の身体に怪我がないか確認を始める。

背はかなり高く、Ｔシャツの上からでもはつきりと分かるほど、かなり鍛え上げられている肉体。しかし、彼を見て一番目を引くのは身体ではない。

では何処を見るのか．．．？

それは顔．．．正確には頭部である。

何故なら、特撮番組の正義のヒーローの様な完全に頭部を覆った赤いマスクであつた。

彼の名は『天体戦士サンレッド』

正真正銘、正義のヒーローだった。

「ん．．．？」

レッドはすぐ近くにもう一人が倒れているのに気がついた。

「おい．．．、おい、ヴァンプ．．．。」

軽く身体を揺さぶる。

ゆさゆさ．．．

「う、うん．．．むにゃむにゃ．．．。」

なかなか起きない。

「起きろっ！埋めるぞ！コラアッ!？」

「ひいつ!？スイマセン！レッドさん!!」

怒鳴り声に、ほぼ反射のみで起き上がる男性。

古代ローマ兵の様な兜、立派な髭、紫のローブという目立つ格好のヴァンプ。

こう見えて、世界征服を企む悪の組織『フロシャイム』の幹部である。

普段は人のいい、カリスマ主夫で、天敵レッドとも（ヴァンプ曰く）良好的な敵対関係（笑）を築いている。

「さっさと起きねえからだろうが。」

「そ、そんなに怒らないでくださいよ、レッドさん。」

「ちっ・・・、んで？怪我とかはねーのかよ・・・。」

「え・・・と、特にありませんね。」

「そーかよ・・・。」

「あの、それでレッドさん・・・？」

「あん・・・？」

「ここ、どこでしょうか・・・？」

「さーな？こっちが聞きてえよ・・・。」

見渡す限りの木、木、木。

しかも時間は夜。闇夜に三日月が浮かんでいる。

「ちょっと待ってろ。」

「え・・・？」

そう言うと、レッドは神経を集中させ、能力を発動させる。

『レッドイヤー』

・レッドマスクの機能の一つ。最大半径10kmの物音を聞き分ける能力・

「・・・ん？・・・これは・・・？」

「何が聞こえたんですか？」

「片方は女・・・？いや、子供か？もう片方は・・・獣か？それともかなりデカいな。」

「ええ！？大変じゃないですか！？何落ち着いてるんですか！！その子を助けてあげないと！！」

「んゝ、でもこの音は・・・。」

「早く！正義の味方なんですからっ！！レッドさん！！」

「あーもー！行きやいいんだろ、行きや・・・。」

レッド達の位置から少し離れた場所

レッドが察知した音源を作り出している二つの存在

・・・ギンツ！！・・・キキン！！・・・ガッ！！

小さな影と大きな影

小さな影は、月光を思わせるほど煌びやかな金髪、透き通る様な白い肌。

可愛らしく整った顔立ちも相まってアンティークな西洋人形を思わせる10歳頃の少女。

しかし、その端正な顔は現在、苛立ちによって歪んでいる。

「ええいつ！忌々しいっ！」

彼女は焦っていた……。戦闘におけるパートナーと寸断され、孤軍奮闘していたが、魔法を発動させる触媒……。魔法薬も体力も既に底を尽いている。

「こんな雑魚に手こずるとは……。！」  
そう言つて、肩で息をしながら相対する大きな影を睨む。

「その雑魚に苦戦しとる癖に、デカイ態度の嬢ちゃんやなあ。」  
大きい影に月光が照らされる。浮かび上がるのは異形。成人男性を遥かに超える身長、筋骨隆々な巨躯、丸太の様に太い手足。しかし、何よりも異形足らしめているのは、頭部より生えている角と、大きな牙。

- 鬼 -

太古より闇の住人として存在している者達。  
只の人間が抗うことも出来ない屈強な存在である。  
そんな存在が目の中の少女に語りかける。

「堪忍やで？ワイかて嬢ちゃんみたいを手にかけるんはイヤなんやけどな、嬢ちゃんは暴れすぎや。仲間大勢やられてもつて、見逃すつちゅーんは出来んのや。命令もあるしな。……。ホンマ堪忍な？」

そついい、少女の身の丈以上はある棍棒を振りかぶる。

少女は体力の限界でもう動けない。  
ならば死を静かに受け入れようと目を閉じた。



ビュオツツ!!

棍棒の風を切る音が迫る。

ズンツ!!

重たい衝撃音。

・  
・  
・  
・  
・

・  
・

「・・・？」

音はすれども、一向に痛みが来ない。  
目を開くとそこには・・・

月光を反射し、闇夜を照らす赤いフルフェイスの男が

横合いから『片手』で棍棒を受け止めている。

「ふう・・・、間一髪つてとこか？」

「「なっ!？」」

新たな乱入者に鬼も少女も驚きの声をあげる。

レッドとしては少女が鬼に襲われているから横槍を入れただけであ  
って、状況とかちんぷんかんぷんである。

とりあえず、デカイ方をぶん殴った。

ズンツツツ!!!

レッドの拳が鬼の腹に突き刺さった。  
「が……あつ……!？」

鬼が崩れ落ちる。

そしてその巨体が粒子となって消えていく。

ボシユウウウウ……

「何だあ？消えちまったぞ、オイ？」

「召喚された鬼は致命傷を与えると、その身は還されるのだ。そんな事も知らんのか？」

レッドが不思議そうにしていると、少女が答えた。

「まあいい、それよりも、見ない顔だが、ジジイの差し金か？」

「あん？ジジイ？誰のことだ？」

「ん？違うのか？」

「ああ、俺達はなんつか、あー……、迷子ってやつだ……」

「……本気で言っているのか？待て、俺『達』？仲間がいるのか？」

「……仲間つつーか、連れつつーか、まああと一人だな。おいヴ  
アンプ！出てきていーぞ!!」

近くから出てきたヴアンプ。レッドからバイクを預かって待機していたのだ。

「はあゝい！もう忘れられてるかと思いましたがよゝ！」

「お前はともかく、バイクを忘れるかよ。」

「ヒ、ヒドイ……。」

「で、迷子と言ったが二人ともここがどこか知らんのだな？」

「ああ、さっぱりだ。」

「ワタシ達二人は気がついたらあつちに倒れてたんです。」

「ああ、乗ってたバイクもブツ壊れちまつてるしな……。」

「ふむ……（嘘をついてる様には見えんな……。）」

二人の様子を黙っていた少女が口を開く。

「わかった、ここの責任者の所まで案内してやろう。どの道ここでは部外者は動きづらいからな、先に会っておいた方が何かと都合がいいからな。」

少女の提案に二人は明るくなる。

「おお、悪いな。助かるわ。」

「でもお嬢ちゃんがこんな時間に一人で出歩くのはどうかと思うんです、ワタシ。」

……ピキッ！

「……ん？どうした？」

固まってしまった少女を不思議そうに見るレッド。

「どうしたの？お嬢ちゃん？」

心配そうに少女に声をかけるヴァンプ。

ぷるぷるぷる……

「……お、おい……？」

「だ、誰が少女かーっつっ！？」

少女は地団駄を踏みながら言う。

「私は！エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル！！600年を

生きる真祖の吸血鬼！闇の福音！なんだぞ！！」

いきなり怒り始めた少女・・・エヴァンジェリンに少し驚いたレッドとヴァンプ。

「お、おお。ほら、謝っとけよヴァンプ！」

「年上だったんですね・・・、無礼な態度で申し訳ありません。」  
深々と頭を下げるヴァンプ。

「フ、フン！わかればいいんだ！わかれば！」

すんなり謝罪されるとは思ってなかったエヴァンジェリンの方が面食らう。

「あゝ、それじゃあエヴァンジェリン？そろそろ案内してくれねえか？」

「あ、ああ、そうだったな。すこし待て。こっちの連れとも合流したい。」

そういつて念話で己の従者に語りかける。

『茶々丸、聞こえるか茶々丸？』

数分もしないうちにエヴァンジェリンの連れがやって来た。

・・・空から。

ドドドドドドド・・・！！

緑色の髪をした女の子が、足からジェット噴射しながら降りてきた。

## F i g h t . 0 1 (後書き)

これより先は、マイペースに投稿していく予定です。

1 1 / 1 修正

## F i g h t ・ 0 2 (前書き)

こんな駄文をお気に入り登録していただけたらとは！

感謝感激です！

がんばって週一以上のペースでがんばりたいと思います！

それでは、どうぞ！

## F i g h t . 0 2

眩い光に包まれた二人の行き着いた先は、生い茂る森。  
現れたのは大きな異形・鬼・

鬼に襲われている少女を助けたレッド。

この少女との出会いが物語を動かし始める。

- F i g h t . 0 2 -

「ご無事ですか！？マスター！」

空からやってきた緑色の髪をした少女が己が主の元に駆け寄る。

「うむ、問題ない。お前こそ大丈夫だったか？」

「はい、損傷率2%以下。問題ありません。」

「そうか、・・・ん？どうした？呆けた顔をしておって。」

エヴァンジェリンが呆然としてるレッドとヴァンプに声をかける。

「紹介しよう、我が従者の茶々丸だ。」

「初めまして、絡繰 茶々丸と申します。以後お見知りおきを。」

丁寧にお辞儀をする茶々丸。

「これはこれはご丁寧に。ワタシはヴァンプといいます。」

「・・・レッドだ。」

「さて、レッドにヴァンプよ。そろそろジジイの元へ行こうではないか。先ほどの礼だ、案内してやろう。光栄に思うがいい。」

「へーへー……。まあ、頼むわ。右も左もわかんねーからな。」

四人（三人と一体？）と一台は夜の森を歩く。

今までの経緯をヴァンプが茶々丸に説明し終えた所で雑談し始めた。

「へー、じゃあ茶々丸さんはロボットなの？」

「はい、ヴァンプ様。」

「うふふ、様なんて付けなくていいよ。」

「了解しました。ではヴァンプさんと。先ほどの問いですが、私はロボット・・・女性型ですのでガイノイドです。」

「へえー、すごいですねえ、レッドさん。」

「ふっ、そうだな、お前の所のプラモデルロボとは比べられねえな？」

「もー！またそうやって意地悪なことを言っただからー！」

そうこうしてる内に森を抜ける。

眼前に広がるヨーロッパ調の街並みに、二人は呆然となる。

「・・・日本じゃねーのか？」

「どどどどうしましょうレッドさん！ワタシ！パスポートとか持ってませんよ！逮捕とかされちゃうんでしょっか！？」

「・・・俺だつて持ってねえよ！」

「困ります、ワタシ！」

そんな二人を怪訝な表情で見るエヴァンジェリン。

「オイ、本気で言っているのか？ここ、麻帆良は日本だろうが。それも国内最大級の学園都市として有名だろうが。麻帆良という名前位聞いたことがあるだろう？」



「……は？麻帆良……？」

二人は間の抜けた声をあげる。

「……フム、茶々丸。」

「ハイ、ここ麻帆良学園は明治中期に創設され、初等部、中等部、高等部、大学部や研究施設などの学術機関の総称です。一帯には各学校が複数ずつ存在し、敷地面積はとても広大です。また、学生寮や神社や商店街などの都市機能も併せ持っており、学術機関と併せて麻帆良学園都市と呼ばれています。各分野にて様々な功績を挙げている機関も多いので麻帆良という名前を一度は耳にしたことがあると思うのですが……。」

「……聞いたことあるか？ヴァンプ。」

「いいえ、それにウチの埼玉支部の知り合いからも聞いたことはありません……。」

「……。」

沈黙する二人。

先頭を歩いていたエヴァンジェリンが振り返って沈黙を破る。

「まあいい、その辺の議論は後だ。着いたぞ。」

エヴァンジェリンの背後には巨大な建物。どうやら校舎の様だ。バイクを脇に停め、中に入る一行。

「ここだ。」

一際大きな扉の前で止まる一行。学園長室と書かれている。

その大きな扉を遠慮なく蹴破るエヴァンジェリン。

ドバーーン！！

「ひょつ!？」

中から響く老人の声。

「オイ!ジジイ!身元不明者二名、連れてきてやったぞ!!」

「身元不明って・・・。」

「・・・まあ、怪しいわな・・・。」

呻きながらも入室するヴァンプとレッド。そして茶々丸。

「もう少し静かに入ってくれんかのう・・・。」

「なぜ私がジジイを気遣わねばなんのだ!」

エヴァンジェリンと話しているのは、異様に後頭部が長い老人であった。

老人は入室してきた三人に気がつく、自分の椅子に深く腰かけ直した。

「では、客人方に改めて自己紹介しようかの。ワシが、この麻帆良学園及び関東魔法協会理事会の長をやっておる、近衛 近右衛門と申す。」

「まあ!これはこれは、ワタシはヴァンプと申します。」

「・・・レッドだ。」

「もう!レッドさんっ!またそんなぶつきらばうに!だからよく誤解されるつかよ子さん心配してましたよ!」

「うるせえよ!お前にや関係ねえだろーが!」

ギャーギャー言い争い始めた二人。

「あー・・・、そろそろいいかの?」

学園長が割って入る。

「・・・っと、悪いなじいさん。」

バツの悪そうなレッド。

「ほっほっ、構わんよ。では単刀直入に訊こう。主らは何用でこの麻帆良に参った？」

先ほどまでの飄々とした雰囲気は既に無い。

老いてなお、関東及び学園最強の魔法使いが放つ殺気が部屋を覆っていた。

返答次第では・・・、そう告げるかの如くの重圧。

しかし、その重圧を真正面から受けていながら平然な調子で言いにくそうにレッドが告げる。

「わかんねえんだよ、マジで・・・。」

「・・・は？」

部屋を覆う重圧が霧散する。

「ほ、本当かね・・・？」

場がなんとも言えない空気になってしまい、困った様子の学園長。

そこに、今までだんまりを決め込んでいたエヴァンジェリンが割って入る。

「嘘はついてないだろう。こいつ等はそもそも麻帆良自体を知らない様だ。」

「ふむ、二人が麻帆良に来た時のことを詳しく教えてくれんかの？」  
学園長は判断材料を少しでも増やす為にレッドに更なる説明を求める。

「ああ・・・。」

そう言ってレッドは事の経緯を話し始める。

神奈川県川崎にて、久方ぶりにバイクに乗ったこと。仕方なく二人乗りしたこと。

かなりのスピードを出していた際に点滅していた用途不明なボタンを押したこと。

ボタンを押した途端、眩い光に包まれて気がついたら、ここの森に二人で倒れてたこと。

「んで、途方に暮れてたところで何か物騒な音が聞こえてきてよ。その場所に向かったんだ。

そしたらそのエヴァンジェリンがよ、でけえ鬼？みてえなのに襲われてたからよお、助けたんだ。」

「ふむふむ、なるほどのう……。」

話を吟味する学園長。

「ジジイ。」

「ほ？」

熟考している学園長に話しかけるエヴァンジェリン。

「ジジイ、こいつ等に危険はないさ。」

「何故じゃ？」

「こいつ等はここが麻帆良であるという事も、麻帆良がどういう土地なのか、どんな物があるかわかっちゃいない。そんな間抜けな侵入者など聞いたこともないだろう？」

「ふむ……。」

しかし学園長とて、組織の長。はいそーですか、とはいかないものである。

「ここからは、私の推論だ。確証もないがいいか？」

「ふむ、聞こうかの。」

「こいつ等について、不可解な点が三つある。」

そう言いながらエヴァンジェリンは人差し指を突き立てる。

「一つ、ここに来るまでに聞いた、こいつ等の周りの環境・常識。600年を生きた私でさえ聞いたことがないことばかりだった。」  
エヴァンジェリンは続ける。

二人がいる世界は、まるでTVの様な平和を守るヒーローと怪人の構図、世界に存在する数々のヒーローと悪の組織、ヒーローと怪人が当たり前に生活する世界。

「二つ、こいつ・・・レッドは相当強い。それこそこの私ですら底が見えんほどに。表だろぅが裏世界だろぅが、ここまで腕の立つ男が、このナリで全くの無名というのがありえん。」

茶々丸が主の言葉を補足するべく言葉を続ける。

「話の中で出てきた組織名、人物、お二人様ご本人の情報を検索した結果、通常のネット及びまほネット

での検索結果は0件でした。」

「三つ、おそらく事の発端であろうこいつ等の持ってきたバイク。

魔力でも気でもない気でもない、未知の『力』の残滓を感じた。あのバイクにある何かしらの装置が作動したのは間違いないだろぅ。」

「軽くスキャンしてみました。バイク自体はほとんど異常がみられませんでした。ただし一箇所、大破している装置を発見しました。全体的に魔法技術が使われていないだろうと思われれます。破損状態からみて、装置の起動は不可能かと思われれます。」

「以上から私は、こいつ等が所謂異世界又は平行世界から来たと推測する。」

「ふむ・・・、異世界のう・・・。」

学園長は推論を聞き終え、椅子に深く座り直して考える。

そして、再び口を開く。

「ワシからいくつか質問をしたい。いいかの？」  
うなずく二人。

「まず、本当にここにきた原因は判らんのじゃな？」

「・・・ああ。」

「はい・・・。」

落ち込み気味の二人。

「そのバイクの修理は出来るのかの？」

「具合見てねえからナンとも言えねえが、難しいんじゃないか？」

「腕つぶしに自信はあるんじゃない？」

「まあな。」

「レッドさんは本当に凄く強いんですよ。」

「その力、弱きものに向けるか？」

今までで一番鋭い眼光の学園長。

「しねーよ。俺はヒーローだぜ？」

「そうですよ！レッドさんはそんなことしませんよ！」

ブンブン！と怒るヴァンプ。

「最後に、衣食住とバイクの修理、当てはあるかの？」

「・・・どっちもねえなあ。」

「どうしましょ・・・。」

わずかな沈黙。

「・・・あい、わかった！どうじゃろう、バイクの修理が出来るまでここで働いてみんか？勿論、衣食住とバイクの修理が出来そうな者も紹介しよう。どうじゃ？」

「そりゃ有難てえけどよ。」

「ええ、本当に！」

学園長の提案に喜びを隠せない二人。

「今すぐ用意できる仕事は、警備員と指導員じゃ。これには相応の腕っぷしが必要じゃから、レッド殿向けじゃのう。ヴァンプ殿は何か得意な物はあるかの？」

「そうですね、お料理かな？」

「コイツ、料理だけはスゲェんだよ。（しかし、悪の幹部が一番最初に思いつく特技が料理って・・・。）」

「ほっほっほ、ならば店でも開いてみますかな？ヴァンプ殿。」

「ええ！？ほ、ほんとに！？」

「お、いーじゃねーか。ヴァンプ、やってみるよ」

驚くヴァンプに、はやし立てるレッド。

「い、いいんですか？実は少しやってみたかったんです。」

「ほっほっほ、では、明日までに必要な書類や手はずを整えておくで。悪いんじゃが、昼前にもう一度ここに来てもらえるかの。ヴァンプ殿、悪いんじゃが明日の昼食をテストとさせてもらうでの。

機材や食材はこちらで用意するので、心の準備はしておくようにの？」

「は、はいいゝ！」

やや緊張するヴァンプ。

「では最後に、今晚二人が泊まる所じゃが・・・」

「おい、ジジイ。」

黙っていたエヴァンジェリンが口を開く。

「今晚は我が家で預かってやろう。」

「ほ？どつという風の吹き回しじゃ？」

「フン・・・、ジジイには関係ないことだ。話が終わったなら、もう連れていくぞ？」

「うむ、今日はもういいじゃろ。」

「ジャマしたなジジイ。行くぞ二人とも。」

ソファから身を起こし、部屋の出口に向かうエヴァンジェリン。

「それでは失礼します、学園長。」

主の後を追う茶々丸。

「お邪魔しました。また明日。」

お辞儀して退出するヴァンプ。

「じゃーな。」

手をひらひらさせながら退出するレッド。

こうして四人は、この地の最高権力者の部屋を後にした。

突然の来客がいなくなり、静寂が訪れた室内。

「ふむ……、異世界からの来訪者……のう。」

そう言い、机の引き出しから一枚の札を取り出す。

「悪いのう、エヴァや……。」

そして太陽はこの地、麻帆良を照らし始める。



## Figure.02(後書き)

誤字脱字等ありましたら、ご指摘下さいませ！

2011/11/1修正

## F i g h t ・ 0 3 (前書き)

こんな小説に2、600アクセス&amp;600PVも！

感謝です！皆さんに言いたい！ありがとう！そして、ありがとう！

これからもがんばっていきますよー！！

## F i g h t . 0 3

森で助けた少女、エヴァンジェリンと茶々丸。

二人の案内でこの地、麻帆良の最高責任者と出会ったレッドとヴァンプ。

学園長の提案により、レッドは警備員兼指導員、ヴァンプは料理屋をやることに。

今日の宿を提供するというエヴァ。

一行はエヴァの家に向かうこととなった。

- F i g h t . 0 3 -

学園長室を出た四人はそのまま学校も後にする。

レッドとヴァンプの足取りは軽い。

少なくとも当面の生活の不安が解消されそうだからだ。

そして今晚お世話になるエヴァンジェリン宅に向かう四人と一台。

「しかしよお、エヴァンジェリン。いいのか？世話になって。そりやまあ有難てえけどよお。」

「エヴァだ・・・。」

呟くように言うエヴァンジェリン。

「あん・・・？」

声が小さくて聞きなおすレッド。

「っ！エヴァでいいと言ったんだ！」

「お、おう・・・。」

怒鳴りちらすエヴァに、若干引き気味のレッド。

「光栄に思っただな！フンッ！」

顔を赤くしてそっぽを向くエヴァ。

「照れ隠しされている所、申し訳ありませんマスター。」

「っ！誰が照れているだ！ええい！このボケロボ！巻いてやる！」

「あああ、いけませんっ！？マスター！そんな乱暴に巻かれてはっ・・・！」

どこからか取り出したゼンマイを茶々丸の頭に突き刺し、グリグリ回すエヴァ。

いきなりの展開についていけず、啞然とするレッドとヴァンプ。

しばらくして落ち着いたエヴァと茶々丸。

「で？一体何の話だ？茶々丸よ。」

「ハイ、レッドさんのバイクのことで提案があるのですが。」

「ふむ？言ってみる。」

「はい、超に相談してみるのは如何かと思ひまして。」

「・・・なるほど、いい案だな。明日にでも連絡を入れておけ。」

「了解です、マスター。」

トントン拍子に話を進めるエヴァ達。

「オイ、その超つてのは誰なんだ？流石に信用出来ねえヤツには触らせたくねえぞ？」

そこに割って入るレッド。

「ああ、まあ信用出来るんじゃないか？」

「はい、超は私の製造者です。他所よりも圧倒的に技術レベルの高い麻帆良においても更に高い技術力を持っており、『麻帆良の最強頭脳』と呼ばれています。」

「なんだか凄そうですねえ。その人なら直してくれるかもしれませんね！」

そうこうしている間に、森の中の少し開けた所に出た四人。そこには二階建ての立派なログハウスがあった。

「着いたぞ、これが我が家だ。」  
そういつて家の中に入っていくエヴァ。

ログハウスを見上げているヴァンプと、邪魔にならないよう隅にバイクを停めるレッド。

玄関を見ると茶々丸が客人二人を待っている。

「ようこそおいで下さいました。中へどうぞ。」

中に入るように促される二人。

「夜分遅くに失礼します。」

「邪魔するぜ。」

レッドとヴァンプが中に入って目に入ってきたのは、いたる所に置かれたアンティーク人形。

見渡す限りの人形、人形、人形。

大勢の人形を呆然と眺めている二人に茶々丸が声をかける。

「お茶の用意が整うまで、少々お待ちくださいませ。」

ぺこりとお辞儀をし、準備の為に台所に引込む茶々丸。

「あ、お構いなく。」

気を遣うヴァンプ。周りを再度を見回してレッドに話かける。

「しかし・・・、凄い数のお人形さんですね、レッドさん。」

「おお、どれもこれも凄え凝ってんなあ・・・。ん？」

そう言いつつ、一体の人形に目を惹かれるレッド。

他のフリルドレスなどの豪華な見た目の人形と違い、黒のワンピースにカチューシャとシンプルな格好。

背中には可愛い小悪魔みたいな小さな羽根がついている。顔はどことなく茶々丸を幼くした様な顔立ち。この人形だけ、他のとは存在感が違うと感じたレッドは人形を手にとってみる。

「何ジロジロ見テンダ？斬り刻マレテーノカ？」

人形が喋った。

しかもとんでもなく物騒なことを言い放った。  
普通なら絶叫物だが・・・。

「あん？やれんのか？」

しかしレッドは何でも無いように言い返す。

「ええゝ・・・。」

横で見ていたヴァンプも呆れてしまう。

「ケケケ、イイ反応スルジャネーカ。気二入ツタゼ、赤イノ！」

「オメーもいい殺気飛ばすじゃねーか、緑の。」

物騒な友情を結んでいる一人と一体に、呆然とするヴァンプの後ろから茶々丸が声をかける。

「お待たせしました。お茶が入りましたので、どうぞこちらへ。」

リビングのテーブルに促されて、席につく二人。

「オイ、妹ヨ。オレモソツチニヤツテクレヨ。」

「はい、姉さん。」

「フリーナ。」

そう言い、喋る人形をテーブルに備え付けてある小さな椅子に座らせる。どうやら定位置の様だ。

「その小さなお人形さんが、茶々丸さんのお姉さんなんですか？」

と不思議そうに尋ねるヴァンプ。

「ええ、マスターの初代従者のチャチャゼロ姉さんです。姉さん、こちらはレッドさんにヴァンプさん。故あって、今晚お泊めすることになりました。」

洗練された動作でお茶をカップに注ぎながら答える茶々丸。

「オウ、チャチャゼロダ！ヨロシクナ！」

「はい、よろしく。」

「・・・おい、オメーは自分で動けねえのか？」

「はい。姉さんは今、とある事情で自力による活動は出来ません。」

「ふーん・・・。」

「忌々しい呪いのせいだな。」

背後からした声にレッドとヴァンプが振り返ると、階段から着替えを済ましたエヴァが降りてきた。

「チャチャゼロは私の魔力で動くんだが、今の私は魔力を封印されていてな。そのせいで自由に動けないのさ。」

思い出してイライラしたのか、やや乱暴に椅子に座るエヴァ。

黙って主にお茶を差し出す茶々丸。

そのお茶を優雅に口に運ぶエヴァ。その所作は非常に美しく、一枚の絵画の様だ。

「シカシ、アノ御主人ガ他人ヲ泊メルトハナ。気ニ入ッタノカ？」

「ぶう~~~~つつつ!？」

・・・訂正。お茶と共に、漂っていた優雅さが木っ端微塵に吹き飛んだ。

「ゲホッ！ゲホッ!？・・・何を言う！チャチャゼロ!？」

咽るエヴァに黙ってタオルを差し出す茶々丸。メイドの鑑である。

「ダツテヨ？他人ヲ泊メルナンテ初メテノコトダシナ。」

「っ！？か、借りを返したただけだ！深い意味はない！！」

ギヤーギヤー騒ぐ主従を他所に、お茶談義するヴァンプと茶々丸。我関せず、と黙々とお茶を飲むレッド。

窓の外を見ていたレッドが立ち上がる。何か無いかとポケットに手を入れると、出てきたのはパチンコ玉。転移前に行っていたパチンコ店のものである。

・・・ガラッ。

急に窓を開けたレッドに全員が注目する。

「・・・気に食わねえな。こういうのはよ・・・。」

手にしていたパチンコ玉を・・・

チュインッ！

親指で弾き飛ばす。  
指弾である。

結果も確認せず、窓を閉めて席に戻るレッド。

「おい、レッド。先刻のは一体、何を撃った？」  
興味深々に聞いてくるエヴァ。



「あん？何って・・・、学校からここまでずっと後を着いて来てた何かだよ。道中迷わないようにとかで監視してんなら別に構わねえが、ずっと家の中まで監視してやがったからな。気に食わねえからよ、警告の意味も含めて威嚇しただけだ・・・。」

「・・・・・・・・。」

エヴァは驚愕した。

自分も気づかなかった、監視の目をいともたやすく看破したこと。そして、察知からの迅速な対応に。

恐らくその監視はジジイによるものだろう。ならば自分が気づけない様な監視を用意することも出来ただろう。だが、レッドは気づいた。その事実にとっても興味が湧いてきた。コイツはどれほど強いのだろう・・・・・・・・と。

一方、レッドは急に黙り込んだエヴァを見て、不安を覚える。

「・・・・・・・・マズかったか？」

「そうですね！レッドさん！いきなり暴力はマズいですよー！！」  
ヴァンプの正論に更に焦るレッド。

「・・・・・・・・おい？エヴァ？」

「・・・・・・・・ふふふ、面白い・・・・・・・・。」

小さく呟くエヴァ。

「あん？おい、エヴァ・・・・・・・・？」

「茶々丸！別荘を用意しろ！！コイツの強さに興味が湧いた！」

「Yes、マスター。」

そう言い、地下へ消える茶々丸。

「オホ！楽シソウジャーカ、御主人。オレモマゼロヨ！」

「くくく、いいだろう。レッド！ヴァンプ！ついてこい！面白い物

を見せてやろう!」

「「?」」

急にテンション上げっぱなしのエヴァに置いてかれてる二人。

一行は家の地下室に降り立った。

そこには大きなガラス球を設置している茶々丸の姿があった。

「準備出来ました、マスター。」

「うむ、ご苦労。」

大きなガラス球を覗き込むレッド達。その中にはお城と海が見える。

「なんだ? 模型? ジオラマか?」

「凝ってて凄い綺麗ですね!」

「おい、二人とも。この円の中に立て。」

言われるままにガラス球の正面の魔法陣の中に立つ二人。

そこにエヴァ、チャチャゼロを抱いた茶々丸が加わり、エヴァがガラス球のボタンを押す。

ポチッ

「ククク・・・、存分に驚くがいい!」

足元に魔法陣が輝き、眩い光が溢れる。

・・・カッ!!

光が収まると・・・

レッドとヴァンプの眼前には、大きく立派な城と南国の海が広がっ

て  
い  
た。

## F i g h t ・ 0 3 (後書き)

感想・ご指摘・ご提案、お待ちしております！

## F i g h t . 0 4 (前書き)

祝！5000PV1000アクセス突発！

皆さん、ありがとうございます！

このような駄文ではありますが、より一層頑張っていきたいと思  
います！

今回、少しでも戦闘描写があります。

それではどうぞ！

## F i g h t . 0 4

たどり着いたのは一軒の立派なログハウス。

そこでエヴァの初代従者チャチャゼロと出会う。

レッドの実力の一端を垣間見たエヴァは、好奇心を抱く。

そして別荘と呼ばれる大きなガラス球を引っ張り出してきた。

そして光に包まれた一行。

- F i g h t . 0 5 -

不思議なガラス球の前に立っていたはずなのに、目の前に広がるのは石造りの大きな広場。

今居る、小さな足場と繋がっている唯一の建造物。それ以外に見えるのは空のみ。

繋がっている通路には柵はおろか、手すりすら付いておらず相当怖い。

「どうだ？この空間は、外での一時間が一日になる。私は別荘と呼んでいる。ここなら監視の目はないし、自由に振舞えるのだ。」

フフン、と自慢げなエヴァ。

「付いて来い。」

そう言い、エヴァはずんずんと進んでいく。その後をすたすた着いていくレッド。

「ひ、ひええええ……。ち、ちょっと待ってくださいよぉ〜！」

顔を真つ青にして腰が引けているヴァンプは、生まれたての子鹿のようにぴるぴるとしか進めない。

しかし、先頭の二人は待つてくれない。

足元しか見れないヴァンプに影が差し掛かる。

「？」

その影に気づいたヴァンプは顔を上げた。

「ヴァンプさん、お手を。」

「ケケケ、情ケネーナ。」

そこにいたのは茶々丸とチャチャゼロ。

「ち、茶々丸さん……。」「

ジン……。

優しき少女に感動しながら手をとるヴァンプ。

「ありがとね〜。」「

茶々丸のエスコートで何とか渡りきったヴァンプ。所要時間おおよそ一時間。

そのまま、茶々丸の案内で広場地下にある部屋に案内される。

部屋には既に先行していた二人が寛いでいた。

床には既に数本の酒瓶が転がっている。

「遅かったな、茶々丸。」

「ヴァンプがヘタレだからな、仕方ねーよ。」

見捨てていった上にあんまりな言われようにな垂れるヴァンプ。

「オ！オレモ混ぜロヨ！」

そう言い、茶々丸の腕から降りて自分で酒瓶を開けるチャチャゼロ。そんなチャチャゼロを見て、レッドは疑問を口にする。

「……ん？自分で動けんのかよ？」

「ここは通常空間より魔力が満ちているからな。私も多少の力の行使が出来る。」

「フーン……、そんなもんか。」

「ねえねえ、エヴァちゃん！」

二人の会話に割ってはいるヴァンプ。

「誰がエヴァちゃんだ！私は600歳だと言っているだろう！！」

「まあまあ、エヴァちゃん。それよりワタシ、魔法が見てみたいの！魔法が……！」

「諦める、エヴァ。コイツには何言ったって聞きやしねえんだよ。」  
ちゃん付けに怒り心頭のエヴァに、キラキラした目で見つめるヴァンプ。

激しく同情するレッド。

「チツ！……ん？いいだろう！魔法だな？ククツ、存分に見せてやろうじゃないか。」



苛立った顔から一転、妖しい笑みを浮かべる。  
そう言うときエヴァはパチンと指を鳴らす。

「チャチャゼロ！茶々丸！準備しろ！！」

「了解しました、マスター。」

「ケケケ、久シブリダゼ！」

早速準備に取り掛かる従者二人。

「お前らはこっちだ。」

エヴァに案内され、先ほどまでいた建物の前にある大広場へと出た。

「準備完了しました。」

「待タセタナ、ケケケケケ。」

しばらくすると準備を終えた従者二人がやって来た。

茶々丸はメイド服から、動きやすそうな服に着替えている。

チャチャゼロは、自分の身の丈ほどもある大振りのナイフを両手に持っている。

「・・・い、一体何の準備を？」

「フフフ、ちょっとした余興さ。お前の望み通り、魔法を見せてやるさ・・・。」

ヴァンプの問いに、エヴァは楽しそうに闇夜の如く漆黒のマントを翻す。

「ただ魔法を見せるだけではつまらん。そこでレッドよ、どうだ？  
ちょっとした力試しをしようじゃあないか。」

「あん？力試しだ？」

「そうだ、貴様と私で模擬戦を行うんだよ。」

「あー・・・、そういう事かよ・・・。」

楽しそうに提案してくるエヴァに、今ひとつ乗り気でないレッド。

「ええっ！？危ないですよー！！」

「何だ？お前は魔法が見たい、私はレッドの実力が知りたい。どうだ？実にシンプルなギブ&amp;テイクじゃないか。悪の魔法使いに無償で、何かしてもらえと思うなよ？」

模擬戦と聞いて慌てるヴァンプに、とてもいい笑顔のエヴァ。

「はあ、しゃーねえなあ・・・。」

そう言い、広場中央に向かうレッド。

その後を続くエヴァ、茶々丸、チャチャゼロ。

「あん？エヴァだけじゃねーのか？」

「私は本来後衛型の魔法使いだからな。前衛に従者を配置するのが本来のスタイルなのさ。どうした？3対1は不満か？」

「別に問題ねーよ。」

ゴキゴキと首を鳴らしながら言うレッド。

「ククッ、大した自信だな。だが、そうでなければ面白くない。」

楽しそうに笑顔を浮かべ、ゆっくりと浮遊していくエヴァ。

「よろしくお願いします。」

「ケケケ、早く殺ローゼ！モウ我慢出来ネーゼ！」

お辞儀する茶々丸と、待ちきれない様子のチャチャゼロ。

「ククツ、精々楽しませてくれよ？レッド。・・・オイ！ヴァンプ  
！」

「・・・ハ！ハイッ！？」

急に呼ばれて驚くヴァンプ。

「合図を出せ！始めるぞ！！」

そう言われ、大きく息を吸い込むヴァンプ。

この後、発せられるであろう合図。それに合わせた初動を行う為に  
集中する三人。

「えっと・・・、始めてくださいーい！！」

あんまりにも気の抜けた合図だった為、空中でエヴァがこけた。

「あんのバカ・・・」

レッドも脱力した。

しかし、そんな空気を意に介さず躍り出る二つの影。

ヒュボツッ！！

「レッドさん、失礼します。」

丁寧な挨拶と共に小手調べの突きを繰り出す茶々丸。  
シャッツ！！

「ケケケ、スグニ終ワルンジャーネーゼ？」

大振りのナイフを首を刈り取らんばかりの鋭き一閃するチャチャゼ  
口。

「・・・はあ。」

気だるそうに二人の攻撃を避け、捌くレッド。

そのまま2対1の接近戦に突入する三者。

絶妙なコンビネーションの茶々丸とチャチャゼ口。

「・・・ええい！そのまま抑えておけよ！リク・ラク・ラ・ライラ  
ツク！」

気を取り直したエヴァが従者二人に指示を飛ばしながら呪文詠唱の  
為、始動キーを唱える。

その間も茶々丸のパンチが蹴りが、チャチャゼロの大小二振りのナ  
イフが、常に同時に振るわれ続ける。

しかし、レッドは気だるそうなまま捌き続ける。  
続けている内に茶々丸が違和感を覚える。

「何故、反撃されないのですか？」

攻撃姿勢はそのままに茶々丸はレッドに問う。

「ん・・・。」

ポリポリ・・・。

レッドは頬を掻きながらも茶々丸の攻撃は避け、チャチャゼロのナイフは捌く。

そこに二人にエヴァから念話が入る。

（もういい、二人とも下がって待機だ。）

「・・・っ！姉さん！」

「チッ！モット楽シミテーノニヨ！」

従者二人が距離を取る。

後方のエヴァが呪文を紡ぎ・・・、

「氷の精霊17頭 集い来りて敵を切り裂け！」

キンキンキン！

17の氷の矢がエヴァの周りに形成される。

「魔法の射手 連弾・氷の17矢！！」  
・・・解き放つ！

魔法を撃ったエヴァは追撃はせずに様子を見る。  
（・・・さあレッド、一体どう出る？）

17の氷の矢がレッドに迫る。

ドキュキュキュキュ！

「・・・オイオイ、初めての魔法だっつーのに・・・。」

初めて見る魔法に多少面食らいつつも冷静に観察する。

（氷を撃ち出すだけ・・・か？まずは・・・無難に回避か？）

余裕を持って回避するレッド。

それを見ていたエヴァは魔法の射手に追尾を命ず。

通過した魔法の射手が通過した後、弧を描き戻ってくるのを見たレッドは迎撃を選択。

（・・・チツ！やっぱ追尾できんのかよ！仕方ねえなあ！迎撃する！）

レッドは腰を落とし、迎撃体勢を取る。

一連の動きを見ていたエヴァはレッドを値踏みする。

（格闘戦は上々、状況判断能力も中々。さて・・・、どう迎撃するつもりだ？ククツ、面白い物を見せてくれよ？レッド。）

レッドは脚を石畳に向けて、踏み抜く！

捲れあがった石畳の破片を拳で撃ちだし、魔法の射手にぶつけ、相殺していく。

ボツ！ボボボツ！

レッドの身に迫る魔法の射手は4発までになっていた。

残り4発の魔法の射手に向けて、掌をかざす！

すると、その掌がみるみる高熱を帯びていくのをエヴァは見逃さなかった。

その高熱を帯びた掌で魔法の射手を相殺していくレッド。

「ふむ、今日はこれ位にしてやろう。」

レッドが綺麗に魔法を相殺したのを見たエヴァが降下しながら言う。それに合わせて従者二人も戻ってきた。

「今撃った魔法が、『魔法の射手』。最もオーソドックスな攻撃魔法さ。どうだった？二人とも。初級とはいえ、初めて見て、体験した魔法は？」

「ちょっとビックリしちゃいましたけど、綺麗でした〜！」

と、やや興奮気味のヴァンプ。

「ん？まああれくらいならどーってこたねえな。ただ、初級っていう位なんだから、中級や上級ってのもあんだろ？」

そして、戦う者であるが為の更に上級魔法を警戒するレッド。

「まあ、その辺は追々だな。戻って晩酌とでも洒落込もうではないか？」

そう言い、建物に向かうエヴァに皆は着いて行くのであった。その晩酌で振舞われるのは、ヴァンプと茶々丸の特製ツマミの数々。エヴァはヴァンプの腕前に驚きつつも、満足そうに舌鼓を打った。酒が進み、ヴァンプは早々にダウン。残ったエヴァ、チャチャゼロ、レッドはのんびりと酒を楽しむ。

「相変わらず弱えなあ、ヴァンプは・・・。」

「ふむ、ところでレッドよ？先ほどの模擬戦で気になっていたのが・・・。」

「あん？何がだ？」

「なぜ開始直後の格闘戦で、防戦しかなかったのだ？あれだけの身のこなし、二人を倒すことは容易かった筈だぞ？」

「ソーダゼー！アンナ簡単ニアシライヤガッテ！」

「・・・ハッ！決まってるだろ？簡単な事じゃねーか。」

「・・・？」

怪訝な表情のエヴァ。それに対し、さも当然とばかりのレッド。

「俺はヒーローだぜ？女子供を殴れる訳ねーだろーが？」

「・・・クッ！アハハハハ！この闇の福音を！その従者を！女子供とはな！！アハハハハ！」

（コイツは本当に面白い！しばらくは退屈しないですみそうだな！）

こうして酒宴は更に盛り上がり、夜も更けていった。



## F i g h t . 0 4 (後書き)

戦闘描写って、こんなに難しいんだって実感しました。そんな今話。まだ作中では1日経ってないんですよ f (^| ^) ;

何とか、一週間に一度の更新は維持！  
もちっと早く作れればいいーのになー！。

## F i g h t ・ 0 5 (前書き)

くっ！生産スピードが上がらない！！  
ストックが全然貯まらない・・・。

それではどうぞ！

## F i g h t . 0 5

別荘にて行われた、エヴァvsレッドの模擬戦。

エヴァはレッドの実力を見る為に、レッドは魔法を知る為に、卓越した格闘技能、状況判断能力を見せるレッド。気をよくしたエヴァが晩酌を始める。

「女子供を殴れるかよ。」

ヒーローとしての矜持をみせたレッド。

ますますレッドを気に入るエヴァ。

酔いつぶれるヴァンプ。

別荘での一夜が明ける。

## - F i g h t . 0 5 -

別荘での一夜が明け、朝を迎える。

一番早く起きたのは、長年の習慣からヴァンプ。

「・・・うーん、朝ごはんの支度しなきゃ・・・。あれ・・・？  
アジトじゃ・・・ない？」

モゾモゾとベッドから這い出るヴァンプ。

起きて目に入ってきたのは、慣れ親しんだ木造二戸建てのアジトの自室ではないことに気づく。

寝ぼけた頭もようやく覚めてきた。

「あ、エヴァちゃん家にお世話になってるんだった。」

お世話になつてゐるならせめて朝食位は自分が用意しようと思ひ立ち、部屋を出る。

二番目に行動を開始したのは茶々丸。

「・・・スリープモード終了。各部オールグリーン。通常モードで起動します。」

起動した茶々丸は朝食の準備を開始するため、待機場所から台所に向かう。

道中、センサーを使って、自分の主、客人に異常がないかを簡潔に確認する。

主と客人の一人はまだ部屋から出ていない…寝ていると判断。もう一人は既に部屋を出ている様だ。

しかし、やたらとウロウロと歩き回っている様子。

「慣れない場所で、迷子になったのかも知れませんね。」

そう判断して迎えに行こうと行動を開始する。

「うつうつ…、どこどこなんだろう？」

意気揚々と部屋を出たヴァンプは、見事に道に迷った。既にさっきの部屋にすら戻れない状態だ。

そもそも、すぐに酔いつぶれて寝てしまったヴァンプは禄な案内もされておらず、迷子になるのも当然といえる。

「まだ朝も早いから、エヴァちゃん達を起こすのも気が引けちゃうし…、レッドさんはこんな時間に絶対起きてる訳ないし…。」

早朝に大声を出して誰かに来てもらうのも気が進まない悪の組織の幹部、それがヴァンプ将軍（カリスマ主夫）なのだ！

そんなヴァンプに救いの手が差し伸べられる。

「見つけましたよ、ヴァンプさん。」

「迷子トカ、笑エルゼ！ケケケ！」

茶々丸からは救いと、チャチャゼロからは追い討ちを受ける。

「うつつ、お台所にも部屋にも戻れないで困ってたの！」

「キッチン…ですか？どういったご用件で？」

プリプリと情けない事を言うヴァンプに茶々丸が問う。

「あ、あのね、お世話になっているからさ、せめて朝ごはんでも用意しようと思ったの！」

「そうでしたか、ですが朝食を用意するのは私の仕事ですので。ヴァンプさんはお客さまですので、こちらがおもてなししなければいけません。」

断る茶々丸。しょんぼりするヴァンプ。

「ケケケ、イージャーネーカ妹！一緒二作ツテヤレバ。」

「…わかりました、キッチンまでご案内します。どうぞこちらへ。」

そこに待ったをかけるチャチャゼロ。

それに同意し、キッチンへと歩きだした茶々丸。

「ありがとう！茶々丸ちゃん！」

こうして茶々丸とヴァンプは仲良く朝食の準備に取り掛かった。

「そういえば、エヴァちゃんは好き嫌いはあるの？」

トントントントントン・・・、包丁が心地よいリズムを刻む。

「マスターはニンニクとネギ以外、好き嫌いはありません。」

グツグツグツ・・・、食欲をそそる香りが広がっていく。

「タダシ、カナリノグルメダカラナ。生半可ナ物ヲ出スト、ヘソ曲ゲチマウゼ？ケケケ。」

茶々丸の頭の上で見学してるチャチャゼロが言う。

「じゃあ、気合いれないとね！」

ムン！と気合を入れるヴァンプ。

「・・・そろそろ完成ですね。」

「ジャア、寝ボスケナゴ主人ヲ起コシテ来テヤルカ。」

茶々丸の頭から飛び降り見事な着地を決めるチャチャゼロ。

「あ、じゃあワタシもついていこうかな。道とか覚えたいし。茶々丸ちゃん、あと頼める？」

「あとはお任せください、ヴァンプさん。」

「ヨシ、ジャア着イテ来ナ！オッサン。」

テテテテ・・・と可愛らしい足音で歩きながら先行するチャチャゼロ。

「あ、待つてよー！」

「姉さんも楽しそうでよかった・・・。ヴァンプさん達のお陰ですね。」

そんな二人を微笑みながら見送る茶々丸は、朝食の仕上げにかかる。

「ヤッパリ、レッドノ奴ハ強エンダナ？」

「そりゃあもう！滅茶苦茶強いんだから！お陰でウチの組織、フロシャイムのちつとも世界征服が進まないもの！いっつも配下の子達がボッコボコにされちゃうの！」

ブンブン！そんな音が聞こえてきそうな程、憤慨するヴァンプ。

「オ？オッサン、部下ガインノカ？」

「沢山いるよ？皆良い子ばかりなんだから！」

「怪人トカ、切ツテミテーナア！ケケケ！」

「クッククッククク！我がフロシャイムの精鋭達、簡単にはやられはせんぞ？」

急に悪の幹部モードになるヴァンプ。（普段はただのカリスマ主夫）

そつこうしている内に、レッドの寝ている客室に到着。

「レッドさ〜ん、起きてくださ〜い！」

ドンドン！

。。。。。

。。。。

「返事ガネーナ？ドースル？ヤツチマウカ？」

「ククク、それもよかるう。やれるか？チャチャゼロよ？」

「ケケケ！任せトケ！」

未だ幹部モードのヴァンプに、悪ノリし、愛用の大振りナイフを取り出すチャチャゼロ。この二人、意外といいコンビかもしれない。

カチャ・・・、キイイイ・・・。

出来るだけ静かに扉を開けるヴァンプ。

「失礼しま〜す・・・。」

悪ノリしても礼儀を忘れない。それがヴァンプクオリティ。

「ククク、暢気に寝ておるわ。そのまま永眠となることも知らずに！（注：小声）」

「ケケケ、斬り刻ンデヤルぜ〜！（注：小声）」



「やれいっ！チャチャゼロよ！憎き宿敵サンレッドを抹殺するのだ  
！！」

「ケケケッ！！」

「『やれい！』じゃねーよっっ！！（怒）」

ガバッ！バサア！ゴッ！！

順番に、レッドが起きた音・シーツをチャチャゼロに被せた音・ヴァンプに拳骨喰らわせた音である。

「ムアー！コノー！離セー！チキショー！」

シーツに包まれたまま、がっちり固定され身動き取れないチャチャゼロ。

そして、頭にタンコブを作り正座させられてるヴァンプ。  
既に説教済みである。

「ううう・・・、すみませんでした。」

「んで？わざわざ、寝込み襲いに来たのか？あん？」

「いえ、朝食の準備が出来たんで起こしにきたんですよ？そしたらノックしてもお返事が無かったもので・・・、つい・・・。」

「そんな軽はずみで人を襲うなよな・・・。」

朝食が出来てるなら待たせる訳にもいかないので、一行はエヴァを  
起こしに行くことに。

「ソコノ部屋ガ、ゴ主人ノ部屋ダゼ。」

コンコンコン・・・。

「エヴァちゃん、朝ごはんですよ。」

「……母親かよ……。」

……ガチャリ。

部屋の主、エヴァが不機嫌そうな顔で出てくる。

「おはよう、エヴァちゃん！朝ごはん出来て！」

「エヴァちゃんって言うなー！！！」

ヴァンプの声を遮り、吼えるエヴァ。朝から元気な吸血鬼である。

「まあまあ、朝ごはんが冷めちゃうよ？エヴァちゃん。」

「エヴァ、諦める……。コイツはずっとこんなんだ……。」

「ぐううう！しかし……！しかし……！」

レッドの声に、納得しきれないエヴァ。

「早く行コーゼ？妹ガ待ッテルゼ？ケケケ！」

「そうそう！朝ごはんが冷めちゃいますよ！」

そう言いヴァンプと共に先に行こうとするチャチャゼロ。

うな垂れて歩くエヴァに、気だるそうなレッド。

「おはようございます。マスター、レッドさん。」

「うむ。」

「おーっす……。」

「ごめんね、仕上げ任せちゃって。すぐ手伝うからー！」

そうして食卓を飾るのは、純和食の朝ごはん。

ごはん・味噌汁・焼き海苔・玉子焼き・焼き鮭・キンピラゴボウ・小松菜のおひたし。

「お？ヴァンプが作ったのか？」

「ええ、お世話になるんで朝食くらいはと思ひまして。」

「おい、エヴァ。期待してーぜ？コイツ、料理だけはスゲーんだよ。」

「ほう？昨日のツマミも中々だった。ならば期待させてもらおうと思うか。」

「ホントは又力漬けも欲しいとこなんだけどね。ささ、召し上がれ。」

朝食は大好評であつた。

朝食を終えて、食後の一服をしているとエヴァが話し始めた。

「さて、晩まで出られんからな。どうせならもう少しこの世界のことを学んでおけ。情報や常識がなければ話にならんだろう。お前らの身元は、あまりバレない方が良いだろうからな。」

「・・・だな、メンドイけどな。」

「お勉強会ですね？」

「学ぶのは、魔法使い共の文化やら価値観やら、そんなところだろう。余計な衝突を避けるのに必要だろう。」

全員が別の部屋に移動。そこは机と椅子、ホワイトボードだけの簡単な教室のような部屋だった。

そこにエヴァがやってきた。教鞭と眼鏡を装備して・・・。

「ふふっ、エヴァちゃん、先生みたいだねー。」

「形から入るタイプか・・・？」

「えゝ、ではこれより授業を始めてやろう。まずは一般的な魔法使い共についてだ。」

「まず、魔法は世間一般には認知されていないのだ。故に、魔法使いは魔法を秘匿する義務がある。バラした奴は魔法使いの組織によって、記憶消去又は、酷いヤツはオコジヨにされるらしいぞ？」

「・・・オコジヨ？」

「怖いですねゝ。」

課せられる罰に怪訝な顔のレッド。  
ゾツとするヴァンプ。

そこから、麻帆良には沢山の魔法使いがいること、そこまで強いこと、魔法使いの組織が麻帆良にあること、＜偉大な魔法使い＞についてを簡単に教えてくれるエヴァ。

昼食をはさみ、魔法使いのタイプなどの戦闘関連の基礎知識を教わった。

その後、夕食を食べ、外とほぼ同じ時間帯になるのに合わせて、別荘を後にする4人。

パアアアアッ！！

「この一瞬で景色が変わるのが凄いですよねゝ！まさに魔法という感じで！ね！レッドさん！」

「あゝ・・・、はいはい。そーだなー。」

転移に興奮しきりのヴァンプに、呆れ気味のレッド。

エヴァと茶々丸は明日も学校がある為、このまま全員就寝となった。

こうして、迷子のレッドとヴァンプの麻帆良での最初の夜が更けていく。

（別荘で一夜明かしたが・・・。）

こうして、太陽は異郷にて休息を得る。

## F i g h t ・ 0 5 (後書き)

誤字脱字がありましたら、お知らせください。

1 1 / 1 2 / 7 誤字修正

## F i g h t ・ 0 6 (前書き)

1 0 , 0 0 0 P V 2 , 5 0 0 アクセス突発！  
皆さんに言いたい！

ありがとう！そして、ありがとう！

でも、ストックがなくなってしまったorz

## F i g h t . 0 6

別荘での一日を終えたレッドとヴァンプ。

朝食作りを通して仲良くなるヴァンプと茶々丸。

模擬戦を通して、レッドへさらに興味を持つエヴァ。

悪乗りするヴァンプとチャチャゼロに対し、麻帆良に来てついに初の説教（肉体言語込み）を炸裂させるレッド。

ここでの常識を色々と教わるレッドとヴァンプ。

別荘を出て、ようやくレッドとヴァンプが麻帆良に来てからの長い一日が終わるのだった。

- F i g h t . 0 6 -

別荘を出た翌朝、全員でヴァンプと茶々丸の合作の朝食を皆で済ませた。

登校の準備をする為、エヴァと茶々丸は二階の自室へと戻る。

学園長の所に顔を出さなくてはいけないレッドとヴァンプもエヴァ達に着いて行くつもりだが、特に準備はないため、そのままくつろいでいた。

しばらくすると支度を終えた二人が降りてきた。

「待たせたな。」

「お待たせしました。」

「二人とも可愛いね。」

「もう出発すんのか？」

「はい、そろそろ出ませんと通学ラッシュに巻き込まれてしまいます。私たちが向かうのは、女子校エリアですので空いている時間帯



でないとレッドさん達が辛いと思いますので。」

「あゝ・・・、たしかに。キツいなあ・・・。」

「え？なんですか？」

女子学生のための満員電車に乗るのを想像してゾッとするレッド。  
キョトンとするヴァンプ。

「ウム、それに人混みなぞ嫌だからな。出るぞ。」

「了解です、マスター。」

「あいよー。」

「行つて来るね、チャチャゼロちゃん。」

「ケケケ、迷子ニナンカナンジャネーゾー。」

パタン・・・。

四人はログハウスを後にした。

ログハウスがある森を出て、学園エリアに入る。

学園エリアの一番奥、女子校エリアに向かう。

まだ時間に余裕がある時間帯のせいか、登校している生徒はまだそこまで多くない。

多くは無い生徒達にチラチラとこちらを見ている。

女子校エリアにおいて、異質な存在が目を引きしてしまう。

筋骨隆々な赤い覆面男と古代ローマ兵士の様な兜と紫のローブ姿の二人の男性。

明らかに浮いているレッドとヴァンプ。

「・・・予想はしてたがよ・・・。視線がキツイぜ・・・。」

「・・・？どーしたんです？レッドさん？」

「・・・お前の無神経さが羨ましいよ・・・。ハア・・・。」

「ククッ、私たちがいなければ、即通報だったかもな？」

居心地が悪いレッドと、一向に堪えないヴァンプ。

そんな二人を楽しそうに笑うエヴァ。

どうフォローしていいか分からずオロオロする茶々丸。

そうこうしている内に、麻帆良学園女子中学校に到着。

「ジジイは大概この学長室にいる。ほぼ女子中にのみ腰を据えているからな、変態ではないかと疑っているんだがな？ 今後用があれば此処に来るがいい。」

「組織のトップが変態なのか？・・・終わってんな。」

エヴァに誤解を植えつけられつつ、玄関ホールを抜けて学長室に向かう。

スーツに眼鏡の男性が学長室から出てきた。

近づいてくるエヴァ達に気づいた男性がこちらにやって来る。

「やあ、エヴァ、茶々丸君。おはよう。」

「フン、タカミチか。」

「おはようございます、高畑先生。」

「エヴァ、そちらの方々が？」

タカミチと呼ばれた男性は人の良さそうな笑みを浮かべる。

しかし、その温和な笑顔の中に一瞬鋭い視線が混ざる。

「ああ、そうだ。赤い方がサンレッド。紫のがヴァンプだ。」

「始めまして、タカミチ・Ｔ・高畑です。学園長の補佐とエヴァ達のクラスの担任をしています。」

「ほとんど出張ばかりのダメ担任だな。」

「ハハハ・・・、耳が痛いね・・・。」

エヴァの皮肉に若干引き攣るタカミチ。

「初めまして、ヴァンプといいます。」

「・・・レッドだ。」

「約束の時間は昼前と聞いてただけけど？」

「登校ついでに道案内してやったんだ、感謝しろ。」

「そうだね、麻帆良は大きいから、初めての人は大概迷うだろうしね。助かったよエヴァ。それじゃあ学園長はもう中にいるから、お二人はどうぞ中へ。エヴァ達はそろそろ教室に行くだろ？」

「そうさせてもらう。行くぞ茶々丸。」

「ハイ、マスター。それでは皆さん、失礼します。」

そう言い、エヴァは颯爽と、茶々丸はペコリとお辞儀して去って行った。

「失礼します。」

「邪魔するぜ。」

「学園長、お二人が到着しました。」

エヴァらと別れたヴァンプ、レッドが学長室に入室する。その後ろにタカミチが続き扉を閉める。

「おうおう、よく来てくれたの。そこに掛けてくだされ。」

学園長の指したソファーに座る二人。

「タカミチ君や、この書類を二人に渡しとくれ。」

「分かりました。」

そう言われて、テーブルに広げられた書類の数々。

「それらの書類は、この学園における身分の証明やと、レッド殿の広域指導員の資格や、ヴァンプ殿の飲食店営業許可、店の所有権等などの一式じゃよ。これで麻帆良では身分におけるトラブルは粗方何とか出来るじゃろうて。」

「ここまでしていただけるなんて！ありがとうございますー！」  
(こんな書類、一晩で準備とか出来るもんか・・・?)

脅威の手際を見せ付ける学園長、感激したヴァンプを他所にざっと書類に目を通すレッド。

「・・・ん？じいさんよお。どの書類も名前の箇所が空欄になってんぞ？」

「おうおう、二人の名前を入れにやなんのじゃがな？サンレッドとヴァンプという名前しか聞いておらんの？どうするかお主等に決めてもらおうと思って、空けておいたんじゃ。」

「ナルホドな。日本人みたいな名前じゃなくてもいいのか？」

「構わんよ。ここには外国の人たちも沢山おるでな。そんなに違和感も無かるう。」

「じゃあワタシは・・・、『ヴァンプ』フロシャイム』で！うふふ、格好よくないですか？ワタシ、外国の人みたいな名前に憧れてたんですよね。あ！じゃあレッドさんは『内田 レッド』でいいじゃないですか？かよ子さんも喜びますよ！」

「バツ・・・！？オメーッ！？誰がするか！！ってオイ！勝手に書類に記入すんじゃないやねえええ！？」

普段からは考えられない俊敏さとパワーで勝手に記入するヴァンプ。

「レッド殿・・・？もう一度書類を手配しようかの？」

「・・・イヤ、そこまで世話になんのもワリイからよ・・・。この

ままでいいわ。」

「そうか、ならこのまま書類は受理するからの。次は二人の仕事についてじゃが……。」

そう言い、傍に控えていたタカミチに目配せする学園長。

「レッドさんの仕事は僕が説明しよう。広域指導員っていうのは簡単に言うと、見回りの先生かな？これだけ大きいとトラブルなんかも結構あつてね。それらに対応するには腕っ節が必要なこともあるんだ。」

「ナルホドな……。自警団みたいなもんか。」

「そーなるかな、後で早速パトロールに行つてもらうから。」

「説明はそれくらいかの？次はヴァンプ殿じゃ。」

「は、はい！」

「この後、簡単な料理を作ってもらい試食させてもらふ。それで問題なければ、店になる物件を見てもらうからの？」

「わかりました！お昼ごはんになるものを作りますね？」

「うむ、空いておる調理実習室を押さえてあるので。今から行くかね？」

「あ、献立も決めたいのでその方が嬉しいですね。」

「じゃあ案内の先生が来たら、早速移動しておくれ。今から呼ぶでな。」

「はい。」

早速電話する学園長。

「もしもし？ワシじゃが、そうそう、すぐ来てくれんかの？うむ、頼んだそい。」

電話も終え、お茶を飲みながら待つこと少し。

コンコン……。ガチャ。

「失礼します、申し訳ありません、お待たせしてしまつて。」

軽くウェーブの掛かった髪の毛の長い眼鏡の美女がやって来た。

「紹介しようかの、こちらは源先生じゃ。」

「はじめまして、源といいます。」

「はじめまして、ワタシはヴァンプと申します。」

「レッドだ……。」

「しずな君、早速で悪いんじゃないかの、例の教室に案内してやってくれい。」

「はい、わかりました。それじゃあヴァンプさん、こちらへ。」

「ハイ。」

源先生に促され、席を立つヴァンプ。

「学園長さん？用意するのはここにいる方々の分ですよろしいですか？」

「うむ、美味しい昼ごはんを期待してるぞい？」

「ウフフ、頑張りますよ。それでは失礼します。」

二人はお辞儀して退室していった。

「それじゃあ僕らも行くか？レッドさん。」

「あいよ。」

今度はタカミチ、レッドが出て行く。

「それじゃあ、学園長。いつてきます。」

「フオッフオッフオ、頼んだぞい。」

「じゃーな、じいさん。世話になった。」

バタン。

誰もいなくなった学長室。

「あの二人が果たして、この麻帆良にどういった影響を与えるんじやろうのお……。」

椅子に身体を深く沈めながら独り呟く学園長。

こうしてレッドとヴァンプ、二人の仕事が始まる。

太陽が麻帆良を照らし始める。

## F i g h t . 0 6 (後書き)

なんとか、この週一回更新のペースは守りたいので頑張って書かなきゃ！

誤字脱字ありましたらご指摘下さい。

1 1 / 1 2 / 7 修正

感想お待ちしております！



## F i g h t ・ 0 7 (前書き)

毎週週刊ペースが維持出来るか、戦々恐々ですw

しかし、中々に作中の時間が進まない(;´・`・)

キングクリムゾンした方がいいのかな？

そんな不安を抱えながらの最新話です。

相変わらずの駄文ですがお楽しみ頂ければ幸いです。

## F i g h t . 0 7

麻帆良に漂着して一日。

生活の為の糧を得るため、学園長の部屋へ。

そこで出会ったのは、かつての英雄の一員、高畑・Ｔ・タカミチ。そして、学園長の手配により得た仕事。

学園広域指導員と飲食店経営。

レッドはタカミチと共に仕事のレクチャーのため、ヴァンプは経営させてもらうため試食テストの仕込みを開始するため、学園長室を後にした。

## - F i g h t . 0 7 -

- レッドとタカミチのお仕事 -

大分、登校してくる生徒も多くなってきた時間帯。

まだ時間に余裕がある為、ゆっくりと登校する生徒が殆どだ。

そんな中、駅から校舎に向かう生徒達の流れに逆らう赤と白の二人の男性がいた。

赤いマスクのレッドと白いスーツのタカミチである。

歩きながらタカミチが口を開く。

「僕達の仕事ってのは、学生間でのトラブルの対処が殆どなんです。」

「そんなにトラブルが起きんのか？」

「ハハハ・・・、ここの生徒達は良くも悪くも元気が良過ぎてねー。」

・・・」

遠い目をしつつ、頬をポリポリと掻くタカミチ。  
そっしている内に、駅前の開けた所に出る。

「今はそれほどでもないんだけど、もうすぐ一気に混みだすんだ。  
そうしたら僕らの出番です。」

「どんなことすりゃいいんだ？」

「まあ、事故なら防止とアフターケア、ケンカなら無力化とかそんな感じで。今日は僕の仕事を覚えてくれたらいいですから。」

「了解。」

広場に目を向けると、確かに徐々に人が増えてきている。

・・・しかも加速的に。

「オイオイ・・・、増えすぎだろ・・・。」

物の数分で広場は人ごみで溢れかえった。

「今くらいの時間から、遅刻間際の電車が到着するまでが一番多くなるんです!」

タカミチの説明を聞きながら、レッドは目の前の景色に絶句した。  
そうこうしていると、ある一角で大勢の男性が集まって騒いでるのをタカミチとレッドが発見した。

「んだあ!？やんのかコラア!？」

「上等だ!コラア!後悔すんなよ!アアツ!？」

空手着と柔道着の団体が睨み合っている。

「また彼らか・・・。」

「また？前もあつたのか？」

「うん、・・・空手と柔道どっちが強いかってしばしば騒ぎになるんだ。」

「しょーもねーなー。こいつ等は、『無力化』でいいのか？」

「ハハ、お手柔らかにね？」

一触即発の二団体の間にタカミチとレッドが割り込んで並び立つ。

「そこまでだよ、君達。」

スーツのポケットに手を入れたタカミチと首をボリボリ掻いて気だるそうなレッド。

急に現れた二人に驚いた彼らは更に騒ぎ出す。

「アアン！？何だデメーら！？マスクなんかしやがって！」

「おい、赤いヤツの後ろにいるの、デスメガネだ・・・。」

「デスメガネ！？アイツが！！？」

「いくらデスメガネでもこの人数なら・・・。」

デスメガネ・・・、それは広域指導員としての高畑・Ｔ・タカミチの異名である。

たった独りで数十人の暴徒を鎮圧した際に付けられたものである。それ以降、チンピラなどには恐怖の代名詞になっている。

「君達？ここいらでお開きにしてくれるなら僕からは何もしないんだけどな？」

柔らかい物腰で解散を促すタカミチだが・・・。

「上等だあ！！デスメガネ倒して俺達が麻帆良最強だあっ！！」

その余裕な態度が、彼らの荒んだ心の火に油を注いってしまった・・・。

リーダー格の男の怒号が掛け声となつて、一斉に襲い掛かってきた！

「やれやれ・・・、元気だねえ。」

「この奴等は、こんなばつかなのか？」

「ハハハハ・・・、否定できないな・・・。」

苦笑しながら迎え撃つタカミチと、呆れながらのレッド。

ドサツ、バタツ！

糸の切れた人形のように倒れていく

音も無くポケットに手を入れたまま周りを鎮圧していくタカミチ。

「（へえ？拳で居合いみてーなことやってんのか？またマニアックな闘い方してんなー。あの速度と正確さなら、一般人にや何してつかわかんねーまま倒されてんだろーな・・・。）」

「（あの赤いの、ボーっとしやがって！！デスメガネは無理でもアイツなら！！）うおおっ！」

タカミチの戦闘スタイルを見ているレッドに不意打ちを仕掛けるのが数名。

「あん？大人しくしてりや怪我しなくてすんだのによ・・・。」

不意打ちの攻撃を気だるそうに全て避けるレッド。  
避けた際、全員にデコピンを叩き込んで無力化していく。

「うおおおお！イテエエエ！？デコピンの痛みじゃねええ！？」

「うつつ．．．。」

「い、痛てえええ．．．！」

「頭骸骨が陥没したみてえな痛みが．．．！」

「おおおおお．．．！？」

「拳骨の痛くないんじゃないか．．．？」

全員気絶させて静かなタカミチと違い、レッドの方は痛みによる地獄絵図が出来ていた。

これから数多の不良をデコピンで悶絶させる．．．、デスメガネと双壁をなす最強の広域指導員『デスマスク』が誕生した瞬間だった。

「つ、強ええ．．．。」

バタリ．．．。

結局、にらみ合ってた2グループまとめたの大乱闘に発展したが程なく鎮火。

タカミチ、レッド共に無傷どころか息ひとつ乱してはいなかった。

タカミチがどこかに電話をしている間にレッドは倒れてるチンピラ達を（引きずって）道路の隅っこに片付けていた。

「ここはこれ位かな？このまま巡回を続けて行くのか。」

「コイツらはこのままでいいのか？」

「うん、救護班に連絡したからね。あとは彼らがやってくれるから。」

「そーか。んで？次はどこ行くんのだ？」

「巡回ルートがあつてね。軽く教えておこうかな。」  
「あいよー。」

そうして、二人は駅前広場を後にした。

最初のトラブル以降大した問題もなく昼前になったのでヴァンプのいる調理実習室に向かった。

- s i d o o u t -

- ヴァンプのお仕事 -

ヴァンプとすずな先生は調理実習室へと向かっていた。

「さ、こちらになります。ヴァンプさん。」

調理実習室に入ると、既に大概の食材は用意されていた。

「わ！スゴい！こんなに沢山あると、なに作るか迷っちゃうな。」

「

用意された食材を見て、はしゃぐカリスマ主夫。

「ふふつ。本当に料理が好きなんですね？」

「ええ！生きがいですから！」

はしゃいだ所を見られて恥ずかしくて赤面しつつもキツパリと答え

る悪の幹部（笑）

「お料理のお邪魔になりますし、私は職員室に戻りますね。」

「あ、はい！お昼、楽しみにしててくださいね？」

「ふふつ。楽しみにさせてもらいます。それじゃあ失礼しますね。」

独りになったヴァンプは料理に取り掛かる。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・

ガラッ。

調理実習室の扉が開かれる。

「おーい、ヴァンプやってつかあ。」

「あ、レッドさん。そちらのお仕事は終えられたんですか？」

「おう、今日は軽くていいんだと。んでいい時間だからよ、オレは直接こっち来た。高畑は学園長とか呼びに行ってるわ。」

「そーですか。こっちももう出来ますよ。」

ガラッ。

再び扉が開かれた。



「ふおっふおっふお、やっとなるかね？ヴァンプ殿。味見しに来たぞい。」

「ご馳走になりますね、ヴァンプさん。」

「いやあ、エヴァから美味しいって聞いてたから実は朝から楽しみなんだ。」

学園長、しずな先生、タカミチがやってきた。

「あ、皆さんようこそ。もう出来ちゃうので、お座りになってくださいね。」

「ウム、ワシら三人が美味しいと言えば合格じゃ。期待しとるぞ？」  
「はい。」

会話しながらも全員分の昼食を準備していくヴァンプ。

「はい！お待たせしました。」

完成した昼食を配膳していくヴァンプ。

「今回は・・・、鯖の味噌煮と大根のお味噌汁、炊き込みご飯と小松菜のおひたし、白菜の浅漬けです。」

「ほう、これは見事な！」

「ホント、美味しそうですわ。」

「珍しくエヴァが褒める訳だ。」

三人とも料理を見た反応はいいようだ。

「ホントは浅漬けじゃなく又力漬けをお出したかったんですけどね。ささ、冷めない内にどうぞ。」

「ウム、そうじゃの！正直もう辛抱たまらんわい！」

「ええ！早く食べましょう！」

「ふふ、学園長に高畑先生？慌てなくてもお食事は逃げませんよ？」

辛抱できない二人に苦笑するしずな先生。

「んん、それもそうじゃ。では・・・。」

「「「いただきます。」」」

ちなみに既にレッドは食べ始めている。

しばらくして、全員食べ終えた。

「いやあ、ヴァンプ殿！大変美味じゃった！」

「ええ、ホントに美味しかったですわ。」

「これは文句なしじゃないですか？学園長。」

「うむ！文句なしじゃわい！」

「やりましたよ！レッドさ〜ん！」

「あー、はいはい。オメデトさん。」

はしゃぐヴァンプを冷めた様子であしらうレッド。

「ヴァンプ殿、早速今から店の改装と住居の手配をさせるからの。また詳しいことは追って連絡しよう。」

「ありがとうございます〜！」

無事、審査を無事クリアしたヴァンプ。

レッドとヴァンプ、二人が麻帆良にて生活する準備が整い始めた。

「ふむ、あと二人に渡すものがあるんじゃない。」  
「こちらです、どうぞ。」

学園長の言葉を受けて、しずな先生が二人に携帯電話を渡す。

「仕事用に渡しておくぞい。何かあったらこの携帯にかけるからの。」

「わかりました。」

「レッド殿は晩にもう一度来てもらう。警備員として顔見せをするでな。」

「あいよ。」

「では、これで解散じゃ。」

こうしてレッドとヴァンプは学校を後にした。

## F i g h t ・ 0 7 (後書き)

誤字脱字、指摘や意見ありましたらお気軽にどうぞ！

## F i g h t ・ 0 8 (前書き)

書きあがったので早速投稿！

お気に入り登録件数が伸びるのは嬉しいものです。皆さま、ありがとうございます！

今回はいつもよりチェックが甘いので、誤字脱字が多いかもしれません。お楽しみ下さい！

## F i g h t . 0 8

レッドとヴァンプは自分の仕事の為に行動する。  
レッドはタカミチと広域指導員として。

ヴァンプは店を持つための試験を受ける。  
学園長達の舌を唸らせ、合格する。

そして、二人は女子中学を後にした。

- F i g h t . 0 8 -

麻帆良の街中を歩く、レッドとヴァンプ。

「フンフフン」

「ご機嫌だなあ、オイ・・・。」

「だってレッドさん！お店出せるんですよ？お店！」

「近えよ！わかったから！顔が近えよ！！」

冷めたレッドに興奮冷めやらぬヴァンプ。

「んで？今からどこすんだ？」

「もうすぐエヴァちゃん達が学校を終える時間らしいので、この辺の商店街をブラブラして待ってるって

。ワタシもこの辺のお店のことも知りたいですし少しブラブラしましょうよ、レッドさん。」

「へいへい。」

そして学校最寄の商店街に足进行ける二人。

しばらく商店街を散策していると・・・

「待たせたな。」

「お待たせしました、レッドさん、ヴァンプさん。」

エヴァ達が声をかけてきた。

「あ、二人ともお疲れ様。」

「で、どうだったのだ？店を持つかどうかの試験とやらは？」

「無事に合格出来ました！」

「おめでとうございます、ヴァンプさん。」

「ありがとう、茶々丸ちゃん。」

盛り上がるヴァンプと茶々丸を他所に、レッドがエヴァに話しかける。

「悪いんだけどよ、今晚もエヴァン所に世話になっていいか？じいさんがよ、まだ家の準備が出来てねえんだと。」

「ふむ・・・、別に構わんぞ？」

「悪いな。」

そんな二人のやり取りを聞いていた茶々丸が話に割って入る。

「なら今日の夕食の材料を買わなければいけません。」

「ふむ・・・、ならば茶々丸はヴァンプと共に買い出しに行つて来い。」

「了解しました。マスターはどうなさるのですか？」

「一度レッドのバイクを超鈴音のヤツに見せようと思ってな。ヤツにこれから向かうと連絡を入れておいてくれ。」

「了解しました。」

「よし、レッドよ。一端バイクを取りに戻るぞ。」

「いつてらっしゃい、二人とも。」

「お気をつけて。」

買い物の為、その場に残る茶々丸とヴァンプに見送られて自宅に向かうエヴァとレッド。

バイクを回収し、超鈴音のラボがある麻帆良大学エリアへと足を開ける。

「んで？その超鈴音ってのはどんなヤツなんだ？」

「ふむ・・・、昨日言ったな？茶々丸の生みの親だというのは。」

「おう、それは聞いたぜ。あゝ、『麻帆良の最強頭脳』だっけか？」

「この麻帆良は世間に比べたら科学技術が優れているらしいが、ヤツは更に飛びぬけているらしい。」

「・・・？ナンだよ、らしいって。」

「仕方なかるう。私は科学が苦手だな、今はタカミチとかからの受け売りだ。」

「・・・信用できんのか？」

「心配いらんさ。ヤツは対価さえ払えばキチンと仕事はしてくれるさ。」

「まあ、実際会ってから考えるか・・・。」

そして、目的の超の研究所がある建物前までやってきた二人。建物の方に視線を向けるエヴァ。

「む・・・？」

「どうした？エヴァ？」



「ふむ、どうやら自ら迎えに来た様だな。」  
「あん？」

そう言われレッドも視線を建物入り口に移す。

そこにいたのは二つのお団子頭の黒髪の少女だった。

その少女はこちらに気づいたのか、こちらに歩いて来た。

「待ってたネ、エヴァンジェリン。そちらの方がレッドサンで合っている力？」

「わざわざ出迎えなくても良かるうに。そうだ、今回、貴様に用があるのはレッドだよ。」

「茶々丸の産みの親っつーからよぉ・・・、もっと博士って感じの爺さんとか想像してたぜ・・・。」

「フフフ・・・、こんな美少女だとは思わなかつた？」

「自分で美少女とか・・・。」

「マア、茶々丸から粗方は聞いてあるヨ。ラボに案内するネ。コッチヨ。」

超のキャラに圧倒されっ放しのレッドだったが、案内に従いラボに向かう。

ラボに到着すると先導していた超がこちらを振り向く。

「ここヨ。オイ！ハカセ！連れて来たネ。」

「はい！」

そしてラボの中にいる人物に呼びかける。

「わっ！大きい人ですねえ。ささ、中にどうぞ！」

中から出てきたのは、黒髪おさげと眼鏡の少女。

少女の言葉に従い中に入る一行。

「では、改めて自己紹介ネ。」

コホンと小さな咳払いをする超。

「フッフ、-ある時はナゾの中国人発明家！クラスの便利屋！マツダイエンティスト！またある時は学園No.01天才少女！そしてまたある時は人気屋台『超包子』オーナー！！それがこの私、超鈴音ネ！ひとつヨロシクネ。」

ドーン！！という効果音が聞こえてきそうな程の勢いで自己紹介を行う超。

「お、おう……。よろしく？」

ちょっと引き気味なレッド。

「超さん、呆れられてますよ？あ、私は葉加瀬 聡美と言います。ハカセと呼んで下さいね！因みに私も茶々丸の産みの親の一人ですよ。」

「オレはレッドだ、ここじゃあ広域指導員つてのをやってる。…今日からだけだな。」

「それで？麻帆良でトップクラスの頭脳の我々を頼って来るとは、一体どんな要件カナ？」

レッドはこの少女達に何処までの事情を話して良いものか分からず、エヴァに視線を向ける。その視線を察したのか、エヴァが話し始め

る。

「ここからは私が説明してやろう。」

「コイツともう一人いるんだが…、この二人は平行世界、または別次元からやって来た…、と言ったら信じるか？」

エヴァはニヤリと、超とハカセを試す様な視線を二人に向ける。

「…っ！！？」

驚愕の表情の二人。

「そんな！あり得ません！！」

「イヤ、ハカセ。魔法世界という実例もある。否定しきれないのも事実ではないか？」

「っ！…いや、でも…。」

否定的なハカセを諭す超。尚もブツブツと思考の海に沈むハカセ。

「それデ？エヴァンジェリン？」

ハカセを置いて続きを促す超。

「ウム、その次元跳躍の原因がコイツのバイクの様なのだ。」

そう言い、壊れたバイクを指差すエヴァ。

「茶々丸にも軽く見せたんだが、バイク自体はスペックこそ馬鹿げているがそんなに変わったものではないらしいんだが、大破している装置があるらしい。そいつが跳躍装置なのではないか？と言って

いた。その装置を診て貰おうと思ってな。」

「そんな未知の技術力に触れられるー、科学者なら断る理由がないネ！わかた、引き受けるヨ。」

「助かる。私は科学なぞサッパリだからな。」

「ならば、早速今から調査開始といこうカ！しばらくバイクを預からせて貰うがいいカナ？」

「おう、よろしく頼む…。あと出来るだけ早く元の世界に戻りてえんだけどよ、やっぱ結構掛かりそうか？」

「フム、まだ診ていないから何とも言えないヨ。どうしたのカナ？元の世界に待っているイイ人でもいるのカナ？」

ニヒヒと意地悪く笑う超。

「心配いらないヨ。もし、本当にこのバイクに次元跳躍の力が有るとしたら、修復して戻る時に事故で跳んでまた時間帯と同じ時間帯に戻れば、元の世界で過ぎた時間はホンの僅かにならないカ？」

やけに的確なアドバイスを言う超。

「そついうもんか…。」

取り合えず、納得するレッド。

「じゃあよ、そこまで急かすつもりもねーから、しっかり頼むわ。」  
「任されたネ！」

そして、連絡先を交換して今回はお開きとなった。

少し時を遡る――

レッドとエヴァと別れたヴァンプと茶々丸は夕食の買い出しに繰り出した。

「さて！じゃあ案内頼める？茶々丸ちゃん。」

「はい、ここはいつも利用している商店街ですので、お任せ下さい。」

二人は献立の相談をしながら商店街を進む。

幾つかの店を回り、買い物も順調な二人に声がかかる。

「あれ？絡繰さんや。」

振り返った先には、茶々丸と同じ制服を着た、真っ直ぐな黒髪の間髪なくの少女がいた。

「こんにちわ、近衛さん。」

ペコリとお辞儀する茶々丸。

「茶々丸ちゃん、お知り合い？」

ヴァンプが尋ねる。

「はい、同じクラスの近衛さんです。」

「ウチ、近衛木乃香います。」

「ワタシは、茶々丸ちゃんの所で少しご厄介になってるヴァンプと

言います。近い内にこの辺でお店を出すからよろしくねえ。」

大人に丁寧に挨拶されて慌てる木乃香。

「あやや！こ、こつちこそよろしくです！所で、何のお店を出しはるんですか？」

「うーん、まだ飲食店としか決めてないの。」

「そーなんですか、ほなオープンしたらきつと行きますね。」

「ありがとね。」

しばし、三人で料理談義に花咲かせ一緒に買い物をして商店街で別れた。

「それじゃあね、木乃香ちゃん。」

「近衛さん、それではまた学校で。」

「楽しいお買い物やった！おおきに、ヴァンプさん！ほな絡繰さんもまた学校で！」

茶々丸とヴァンプはレッド達よりも先に帰って来たので、そのまま夕食の準備にはいった。

ガチャッ！カランコロン。

「戻ったぞ。」

扉が開いた後、聞こえるのは主の声。

「お帰りなさいませ、マスター。」

「うむ。」

「また世話になるわ。」

「ヴァンプさんはもうお戻りですよ。」

パタパタパタ・・・

「レッドさ〜ん、エヴァちゃんご苦労様〜！」

奥からエプロン装備のヴァンプが出てきた。

「晩ご飯、出来てますよ〜。」

「…なんで他人の家でここまで自然に主夫でいられるんだよ、お前はよお…。」

そして四人で、ヴァンプ & a m p・茶々丸合作ちらし寿司を堪能したのであった。

「そろそろ…か。」

食後にのんびりしていたレッド達だが、そろそろ学園長が言った『顔合わせ』の時間が近づいて来た。

「ウム、確かにそろそろ出んといかん時間だな。非常に面倒だが出るか。茶々丸、準備だ。」

「わかりました。」

そして四人は世界樹前広場に向かう。

これから太陽は、麻帆良の夜の顔を知る。



## **F i g h t ・ 0 8 (後書き)**

誤字脱字、意見等はお気軽に感想まで！

## F i g h t . 0 9 (前書き)

今週は体調が悪かったんですが、代わりに(?)筆の調子が良かったみたいです。

過去最長の文章かな？

あと、ルビ振り機能を使い始めました。

しかもバトルパート有り。やっぱりバトルは難しいです。

それではお楽しみください！

## F i g h t . 0 9

レッドは『麻帆良の最強頭脳』こと超 鈴音と接触をとる。  
バイクに着いていた謎の装置の調査、修復の為に協力を要請する。  
元の世界に帰る為に。

事故が発生した時間軸に跳躍すれば、時間経過も殆どないと言う超  
に、かよ子の事が心配だったレッドは一先ず安堵する。

一方ヴァンプは、茶々丸と買い物最中に近衛木乃香と出会い、意  
気投合する。

夕食を終えた四人は世界樹前広場にて夜の警備員としての『顔合わ  
せ』に赴くのだった。

## I F i g h t . 0 9 I

夜の麻帆良を歩くレッド達一向。

「いちいち雑魚どもの都合に付き合わされるのは面倒だな。」

「ん？雑魚？他のそんなに弱えのか？タカミチや爺さんはそんなで  
もなかったんじゃないか？」

「あの二人はな。それ以外は烏合の衆さ。その癖、正義だ理想だと  
五月蠅くて敵わん。」

「正義…ねえ…。」

「顔合わせて事は、自己紹介とか考えないとダメですかねえ？レ  
ッドさん。」

そうこうしている内に広場に到着。

どうやら自分達が最後だった様で、既に皆集まっている。

スーツ姿の男女、シスター、学生、多くの人々が集まっていた。

その中にタカミチもいて、こちらに軽く手を挙げて挨拶してきたので、レッドも軽く挨拶を返す。

そして集団中央にいた学園長もこちらに気づき、声をかけて来た。

「フオツフオツフオ、よく来たの。」

「悪い、待たせたか？」

「何、時間通りじゃ。気にしないでいいぞい。」

今日の主題、新たな顔ぶれが登場したことによりざわつく周囲。様々な感情を乗せた視線に晒されるレッドとヴァンプ。

「ゴホン！ 静まるのじゃ！」

学園長の一括が響き渡り、静かになる周囲。

「諸君！ 忙しい中、集まってもらって感謝するぞい！ 今回集まってもらったのは、皆に新しい仲間を紹介するためじゃ！ レッド殿、前へ。」

促されて前に出るレッド。

「彼はワシの知り合いでな、広域指導員と夜の警備員をしておもうと思つとる。彼の名は『内田 レッド』じゃ。裏での名はサンレッドという。よろしくしてやつとくれい。」

学園長の紹介に再びざわつく周囲。

「サンレッド？聞いたことがないぞ？」

「あの覆面は？なぜ素顔を出さないんだ？」

「本名なのか？」

そのざわつきに再度、学園長の一喝が響き渡る。

「ゴホン！！静粛に！！彼の身元についてはこのワシ！！近衛 近右衛門の名に誓って保証しよう！万が一、何かあったとしても儂が責任を取る！」

この地に置ける最高責任者にそこまで言われては正面から不満を言うものはいなくなった。

静かになったのを確認した学園長は続ける。

「心配はいらぬ。納得出来ん者は、今後の彼自身の働く姿で判断すればよい。よいな？」

周りは無言。その無言を肯定と捉え、話を進める学園長。

「では、彼の實力試しを行う。相手は誰にするかの・・・？」

そこにレッドが割って入る。

「・・・爺さん、指名していいか？」

「ひよっ？構わんぞい？」

「悪いな・・・。」

そう言いレッドは広場中央にて相手を指名する。

「俺は・・・、高畑・Ｔ・タカミチを指名する。」

ザワッ！

無名の男が：学園長を除き、学園最強であり、かつて『紅き翼』に所属し、現在も『悠久の風』にて第一線で活動している英雄を指名して来た。

よって、周囲からの視線も一気に険しいものとなった。

「ククク！レッドのヤツ、態々周りの者共を煽りおって。楽しくなってきたな。」

その険しい視線の中で、唯一険しい視線を送っていない三人、エヴァが楽しそうな笑みを零す。

その横でレッドの心配をするヴァンプはオロオロしていた。

「レッドさーん・・・、わざわざそんな事しなくても・・・。」

「僕で、いいのかい？」

啜えた煙草を吹かしながら前に進み出るタカミチ。

「ああ、こん中じゃあお前さん位じゃねーと意味がねえからな。」

レッドの強気な物言いに苦笑いするタカミチ。

「フフ、ならその期待に答えなきゃいけないな。学園長、僕なら構いません。やらせて下さい。」

首と拳をゴキゴキ鳴らして準備するレッド。

両者が一定距離を保ち、広場中央で対峙した。

「本人からの指名じゃしの・・・、高畑君もああ言つとる事じゃし。よからう！周囲の皆の衆！認識阻害、人払いの結界を各々強化してくれい！」

周囲の魔法使い達が指示を受け取り行動に移す。

「よいか？あくまで腕試しじゃからの？どちらかのギブアップかチエックメイトで終了じゃ。あまり派手な事はせんでおくれ。」

「わかりました。」

「あいよ。」

戦闘が始まる前の緊張感が二人の間で高まっていく。

それに吞まれたのか、周囲のざわつきも無くなり広場を静寂が支配する・・・。

その様子を見ていた学園長が大きく息を吸い込む。

「始めいつー！」

合図と共に、スラックスの両ポケットに手を入れるタカミチ。悠然と佇むレッド。

「来ないのかい？レッド君。」

「・・・そうだな。挑戦者から行くのが礼儀ってヤツか。」

そう言い、レッドは無造作に歩いてタカミチに近づいていった。

「流石に無用心過ぎないかい？」

苦笑するタカミチ。

「なあゝに、ホンの挨拶代わりってヤツだ・・・よつとお！」

レッドは拳を繰り出す！

ボツ！！

気や魔力の強化もない、ただのストレートが空気の壁を貫く音がする。

「っ！！」

無造作に繰り出されたパンチは予想よりも鋭く、速かった為、タカミチは驚きつつも上半身を捻り回避。

「いやあ、ビックリしたよ。」

「そりゃどうも。」

「じゃあ今度はこっちの番だ！」

少し距離を取ったタカミチが腰溜めに構える。

パンツ！！



タカミチの腕が僅かにブレたと思った瞬間に軽い打撃音。

- 居合い拳 -

ポケットを鞘代わりにし、拳圧を撃ちだす戦闘技法。近く中距離を得意としている。無音拳とも言われる通り、音も無く撃ちだされる拳圧は魔力や気ではなく『空気の塊』な為、視認が極めて困難で回避し難い攻撃となっている。

タカミチの戦闘スタイルを知るギャラリー達は、レッドが成す術もなく喰らった音だと思った。

しかし！レッドはその視認が困難な拳圧を殴った、迎撃した音だった。

これにはタカミチが驚いた。

「まいったな、初見で迎撃されるなんて初めてだよ……。」

「確かにな。ありゃあ見づらいわ。でもよ、初見じゃあねえからな。」

「初見じゃない……？居合い拳の使い手との戦闘経験があるのかい？」

パンッ！パパパパンッ！！

再度タカミチからの攻撃。今度は単発ではなく連射。

「いや、戦うのは初めてだな。」

やはり全てを迎撃しながら前進するレッド。

「……？どういうことだい？」

再度距離を取りつつ、怪訝な表情のタカミチ。

「今朝、チンピラ相手に使ってたろ？それ。」

「・・・っ!!」

今度は驚愕の表情を浮かべ、動きが止まるタカミチ。  
更に距離を詰めるレッド。

「あれだけで見切ったっていうのかい？」

「攻撃直前のモーションさえ何度か見れりゃ、後は大体何とかなんだろ。」

「・・・普通は何ともならないんだけどな・・・。」

呆れるタカミチ。

「それより大丈夫か？」

「何がだい？」

「そこは俺の距離至近距離だぜ？」

「っ!？」

残っていた距離を石畳が爆ぜる程の踏み込みにより、一歩で詰める!!

「オラァ!!」

「くっ!!」

再度レッドの拳が繰り出される!

居合い拳は至近距離に適しておらず、守りに徹するタカミチ。  
連撃の隙を縫い、高速移動術『瞬動術』で距離を取る。

シュッ！！

「お？ワープか？スゲエな！」

パパパン！

再度、タカミチからの居合い拳による牽制。

レッドは迎撃ではなく、回避で距離を詰める。

「そんだけ撃たれば、嫌でも慣れちまうぜ？」

「これだけ早く順応されちゃうとシヨックだね。このままじゃ君の力も測れないし、ちよつと本気でいこうかな。」

「ようやくかよ？待ちくたびれたぜ。」

「フフ、悪かったね？左腕に『魔力』、右腕に『気』、合成！！」

タカミチの胸の前で両の掌をかざす構えを見てエヴァが呟く。

「やはりアレを出すか・・・、タカミチ。」

「マスター、『アレ』とは？」

「ヤツが死に物狂いで体得した、本来反発する魔力と気を融合させ、  
アルティマアーツ爆発的な能力向上を引き出す究極技法、  
シンタクス・アンティケイメノイン『気と魔力の合一』、また  
の名を『咸掛法』という。」

「むう！皆の衆！！防護結界も強化するんじゃない！！早く！！」

「り、了解しました！！」

咸掛法の発動を確認した学園長も即座に周囲に指示を飛ばす！

+++++. . ! ! !

身体にオーラを纏わせたタカミチが再度ポケットに手を入れる。先ほどまでとは段違いのプレッシャーを感じるレッド。

「んな面白そーな隠し玉持つてなら出し惜しみしてんじゃねーよ!」「ええ、最初から出しておけばよかったかな。ここまで心躍るなんて久しぶりだ。それじゃ一発目はサービスです。避けて下さいね?」

豪殺！！居合い拳！！

ドゴ<sup>ン</sup>ツツ！！！！

石畳に覆われていた広場に巨大なクレーターが出来た。

先ほどまでの居合い拳が連射重視のマシンガンとしたら、今の居合い拳は威力重視の大砲の様だった。

そのあまりの威力にレッドは・・・笑っていた。

「ははっ！いい物持っでんじゃねーか！！楽しくなってきたぜ！！」

「期待に添えられた様で何より！！・・・ハアツ！！」  
「オラア！！」

豪殺！居合い拳！！

その暴力的な拳圧をレッドは、再度正面から叩き潰した！！

ドゴゴンッ！！

「っ！なんて出鱈目なパンチだ！」

タカミチは驚愕しつつも牽制に三度、居合い拳を連射。続けて豪殺居合い拳を織り交ぜる！

パパパパン！！ドゴン！！

流れ弾が結界に触れる度、結界は軋みをあげ、術者達は苦悶の声を漏らす。

それほどの威力。

回避と迎撃を行いながらレッドは言う。

「そうそう、言っとくけどな？」

迎撃を、回避を豪殺居合い拳にのみ絞り、無造作にしかし、最短距離を被弾しながら直進するレッド。

「こん位なら、俺にや効きやしねーぜ？」

「なっ！？」

再度、至近距離に持ち込んだレッド。

もう一度瞬動で距離を取るタカミチ。

それに驚異的な脚力で追いつくレッド。

「もう逃がさねーよ。」

ポケットから両手を出し至近戦闘に切り替え様とするタカミチに、レッドは言う。

「一発目はサーブスだ、腹に力込めて、歯あ食いしばりな。」

「・・・っ！！」

「オラアッ！」

レッドがボディヘアッパーを見舞う。

直後、強烈な衝撃がタカミチの腹部を襲う！！

ゴッ！！

「うっ……あっ！！」

片膝について苦悶の表情のタカミチ。

「お？ホントに耐えたのか？やっぱアンタ凄えよ。」

「ぐ……ふう、咸掛法での最大防御を……、ブチ抜いてここま  
でダメージが通るなんて、本当に非常識な拳……ですね……？」

「……そうか？」

ポリポリと頬を搔くレッド。

「学園長……、僕のギブアップです……。」

「……！それまで！！」

「ほらよ。」

「……スマナイね。ちょっと脚にキテて立てそうになかったんだ。」

タカミチに肩を貸すレッド。

「これで実力も証明された。今宵からレッド殿は我らの仲間！よいな？」

誰からも不満の声は上がらなかった。

「ちよつといいか？爺さん。」

「なんじゃ？レッド殿。」

レッドは周りを見渡したあと、大きな声で言った。

「いきなり新参者を信用しろつても無理な話だし、俺も人付き合いが苦手だよ。だから不満があんならよ、直接言いに来てくれ。それが言葉でも拳でもどっちでもいいからよ。俺はそれを真正面から受け止める。あとは信用は仕事で得るからよ。sonだけだ。じゃあな。」

そう言い、肩を貸したタカミチの案内で治療所にタカミチを連れて行く為、レッドは立ち去った。

その不器用ながらも一生懸命こちらとの関係を築こうとしている様は周囲の魔法使い達の陰悪な雰囲気を少し、和らげるのだった。

それを見届けた学園長は声を高らかに告げる。

「では、今宵はここまで！解散じゃー！！」

場所は変わり、魔法使いの診療所。

「はい、これで大丈夫です。」

当直の治癒術士が治療を終え、退出する。

「便利なモンだな、魔法つてヤツは・・・。」

「ええ、でも同時に危険でもありますから。」

スーツを着なおしたタカミチと、付き添っていたレッドは診療所を後にする。

すると、そこにはエヴァ・茶々丸・ヴァンプの姿があった。

「遅いぞ、貴様ら！いつまで待たす気だ！」

「お体は大丈夫ですか？高畑先生。」

「レッドさん！心配しましたよー！でもワタシ達とはあんなに真面目に戦ってくれないのに！ズルイですよー！」

「あゝ、うつせ！うつせえよヴァンプ！」

「なんだい？心配してくれたのかい？エヴァに茶々丸君？」

「心配なんぞしらんわ！」

「先ほどまで、マスターは落ち着きなくソワソワしていました。」

「茶々丸！？ええい！！余計な事を言うな！！巻いてやる！巻いてやる！！」

「いけません！マスター！！そんなに乱暴に巻かれては！ああああ！！」

「ははは、相変わらず素直じゃないなあエヴァは。」

「タカミチもうるさいわ！」

「なあ、高畑さんよ？」

「なんです？レッドさん。」

「俺の事はレッドで構わねえよ。この後どうだい？一杯。」



クイツつと杯を飲むゼスチャーをするレッド。  
クスツと笑うタカミチ。

「じゃあこつちもタカミチで。いいですね、じゃあ行きつけの飲み屋に行きましょうか。」

「おお！話が早いな！敬語も堅っ苦しいから、なしな！」  
「わかった。」

「ズルいぞ！レッドにタカミチ！二人だけで盛り上がりおつて！！私も混ぜんか！！」

「そうですよ！レッドさん！」

「嗚呼・・・、マスターがとても楽しそう。」

こうして五人は居酒屋に繰り出した。

（注：エヴァは幻術で大人の姿になって）

これを機に、レッドとタカミチはちよくちよく呑みに行く間柄になる。

こうしてレッドはこちらの世界での友を得る。

この時の飲み会は明け方まで続き、大いに盛り上がった。

余談だが・・・、レッド・エヴァ・タカミチ・ヴァンプは翌日、二日酔いと寝不足で朝から大変だった・・・。

太陽は麻帆良にて力を示す。

## F i g h t ・ 0 9 (後書き)

ルビ振りを使い始めたので、誤字脱字が増えてそう・・・。

誤字脱字、ご指摘に意見はお気軽に感想まで。

## F i g h t . 1 0 (前書き)

祝！10話目！！メリークリスマス！！

なんとか続けることが出来たのは、皆さんのお陰です！！ありがとう！

これからも頑張っていきますよー！

## F i g h t ・ 1 0

レッドのもうひとつの仕事『夜の警備』。その仕事に携わる面々への顔見せと腕試し。

その為にレッドは世界樹前広場にやってくる。

そこにいたのは多くの麻帆良の裏の顔に携わる人々 - 魔法使い -

彼らに実力を示すため、麻帆良の最高戦力であり、英雄である高畑・T・タカミチを指名。

居合い拳の使い手タカミチを終始圧倒し、彼の本気『威掛法』を引き出させる。

それすら正面から叩き潰し、周囲の人達に実力を示したレッドは言う。

「文句があるなら正面から来てくれ。受け止める。信用は仕事で得る。」と。

腕試しを通じて意気投合するレッドとタカミチ。

そこにエヴァ達を交え居酒屋で宴会して夜は更けていくのであった。二日酔いというオマケつきで。

- F i g h t ・ 1 0 -

くヴァンプのお店く

少し時間は遡り、早朝。

「全機能オールグリーン。スリープモードから通常運転に移行します。」

昨夜の宴会の影響が全くない茶々丸が行動を開始する。

「昨夜は遅くまで盛り上がっていましたし、朝食は軽いものにしておきましょう。」

朝食の準備に取り掛かる茶々丸。

いつも自分と同じ位にキッチンに出てくるヴァンプがいないことに気づく。

「二日酔いかもしれませんね。お水を持って行って差し上げましょう。」

水差しを持って、ヴァンプにあてがっている客室に向かう。

コンコン・・・

「はあゝい・・・。」

中から細かい返事が聞こえる。

「失礼します、ヴァンプさん。」

ガチャリ。

「いつも降りてくる時間に降りてこられなかったので様子を見に来ました。」

「ありがと、茶々丸ちゃん。」

「こちらにお水を置いておきますので。では朝食の準備に戻りますので。」

「ごめんね、ワタシもすぐ行くから。」

水差しを置いた茶々丸はキッチンへと戻る。

朝食を作っていると、次に降りてきたのはレッドだった。

「あー・・・、頭痛てえー・・・。」

「おはようございます、レッドさん。」

「あー、おーっす・・・。」

「どうぞ。」

茶々丸は二日酔いの薬と水をレッドに差し出す。

「お、悪いな。ついでになんか軽い頼むわ。」

「ばい、もうすぐ出来ますので少々お待ちください。」

「消化に優しいお粥にしました。いくらかトッピングも用意しましたので、お好みでどうぞ。」

「サンキュ。そーいや、ヴァンプはどーした？やっぱ二日酔いか？」

「ええ、大分辛そうでしたのでお水を持っていきました。」

「アイツ、弱い癖に飲みたがるからなー。ま、自業自得だな。」

お粥を美味しそうに食べるレッド。

「ご馳走さん！んじゃあ俺はボチボチ出るわ。」

「わかりました。ヴァンプさんにこの鍵を渡してありますので。」

「ホント悪いな。じゃあな。」

「はい、いつてらっしゃいませ。」

レッドを見送った後、茶々丸は主人の様子を見に行った。

「失礼します、マスター。」

「ケケケ！オウ、妹ジャネーカ！」

「姉さん、こちらにいらしたんですか。」

「うっ、茶々丸か……。チャチャゼ口をどうにかしてくれ……。」

「姉さんが何かしたんですか？マスター。」

「酒盛りに参加出来なかった腹いせに、一晩中笑い続けおった……。」

「ケケケケケ、従者ヲ放リツパナシナゴ主人ニ、才仕置キシタダケダゼ？」

「そろそろ起きないと学校に遅れてしまいます。」

「くうう、忌々しい呪いめ……!!！」

エヴァは自身に掛けられている強制的に対象者を登校させる呪い『登校地獄』に憤る。

「何とか……。準備する……。っ!!！他の準備は任せたぞ!!！」

悲壮な叫びではあるが、ただの二日酔いである。

「了解しました、マスター。」

「あと……。そのアホ人形も連れて行け!!！」

チャチャゼ口を扉まで戻っていた茶々丸に投げつける。

「ケケケ、マタ子守唄ガ欲シクナツタラ呼ンデクレテイーゼ？ケケケー!!！」

「早く……。連れて行け……!!！」

「わかりました。」

パタン。



「姉さんは自力では動けないのに、どうしてマスターの寝室に？」  
「ん？昨夜帰ッテ来タ時、酔ッ払ッタゴ主人ガ自分デ連レテッタン  
ダヨ。」

「そうでしたか・・・。」

「宴会ナラ混ザリタカッタゼ。」

「きつとまた機会がありますよ。」

その後、なんとか準備を終えたエヴァが出てきた。

「ま、待たせたな。」

「ギリギリダゼー？」

「朝食を摂る時間が無くなってしまいましたので、学校に着いてからにしましょう。」

「レッドとヴァンプは？」

「レッドさんは既に出られております。ヴァンプさんはまだ寝ておられます。」

「そうか。よし、いくぞ。」

「姉さん、ヴァンプさんとお留守番よろしくお願いします。」

「任シトケー！」

ボタン

「ツツテモ起キテ来ルマデ暇ダナー。」

「うつうつ、大分マシになった・・・。」

10時を過ぎた頃にようやくヴァンプが降りてきた。

「ケケケ、酷エ面ダゼ？」

「あ、チャチャゼロちゃん。おはよう。皆は？」

「モウ、トックニ出掛ケチマッタゼ。」

「そっかー、悪いことしちやっただなあ。」

悪いことに罪悪感を覚えてしまつ、悪の組織の將軍。

茶々丸の作っておいてくれた朝ごはんをチャチャゼロと雑談しながら食べ終え、洗い物を済ませた頃にヴァンプの携帯が鳴る。

「電話ダゼー？」

「はいはい、今出ますよーっと。もしもし、ヴァンプですが・・・。」

「

「おお、ヴァンプ殿か？近衛じゃが・・・。」

「ああ、学園長さん！どうなさったんです？」

「店の方が一段落ついたでな、ヴァンプ殿に一度見てもらおうと思つての。」

「！！ホントですか！？行きます行きます！これからお伺いしても？」

興奮冷めやらぬヴァンプ。

「勿論、構わんぞい。では待つとるからの。」

ガチャツツーッ・・・。

「直ぐに準備しないと！」

「マタ留守番力ヨ・・・。」

すると寂しそうな（と言っても無表情だが・・・）チャチャゼロが視界に入った。

「チャチャゼロちゃんも行く？」

「イイノカ？」

「戸締まりをしっかりとっておけば大丈夫でしょ！」

「オウ！着イテ行クゼ！」

それからトートバッグ（inチャチャゼロ）を担いだヴァンプがしっかりと戸締まりを確認してから出掛けて行った。

ヴァンプが学園長室に到着。

コンコンコン・・・。

「失礼します。」

「おお、随分早かったのう。」

「もう嬉しくて、張り切ってしまいました。」

「ほっほ、そうかそうか。」

そう言った学園長は書類と地図をヴァンプに渡す。

「ここがヴァンプ殿の店じゃよ。店の二階に住める様にしとるよ。」

「何から何までありがとうございます！」

「今、業者が入つとるからの。昼にはライフラインも通るぞい。今から見に行ってみるかの？」

「はい！」

部屋を出ようとするヴァンプは扉を開けようとしたが、それよりも先に扉が開く。

「おいジジイ！茶を飲ませろ！！」

サボりに来たエヴァがやって来た。

「ム？ヴァンプか？」

「あ、エヴァちゃん。」

「ヨウ、ゴ主人。」

「ん？チャチャゼロもいるのか？どこだ？」

「ココダ、ココ。」

ヴァンプがトートバックからチャチャゼロを出してあげる。

「二人はどうしてここにいるんだ？」

「ワタシ達はねえ、これから自分の店を見に行く所なの。エヴァちゃんは？」

「サボリだか？・・・ふむ、面白そうだ。私も着いて行こう。」

勝手に同行を決定するエヴァ。

「おお、なら調度ええわい。エヴァや、ヴァンプ殿を案内してやってくれい。」

「む、まあいいだろう。地図を貸せ。・・・ふむ、よし行くぞ。」

そう言い出て行くエヴァ。

慌ててバックにチャチャゼロを入れて、後を追いかけるヴァンプ。

「お邪魔しました。」

ボタン

そしてエヴァ先導の元、やって来た一軒の建物。  
最後にもう一度、地図を確認するエヴァ。

「ん・・・、ここで間違いないな。」

中から業者が出てきた。

「ヴァンプ様ですね？この工事を担当させていただいてる者です。  
ご案内しますのでどうぞ、中へ。」

「あ、はい。」

中に入る一行。

「・・・と、なります。何か質問はございますか？」

「んゝ、特にありませんねゝ。」

「そうですね、水道・ガス・電気は既に通してありますので。こちらが鍵になります。それでは失礼します。」

「はいゝ、お疲れ様ですゝ。」

そうして業者は帰っていった。

「どう？エヴァちゃん、チャチャゼロちゃん。ここがお家と店になるんだよゝ。」

「なかなかいい立地じゃあないか？」

「ドンナ店ニスルンダヨ？」

「うん、学生さん向けの定食屋さんかな。って。晩はお酒もだそうかな？」

「ふむ、楽しみにさせてもらおうか？」

「飲ミニ来ヨウゼ！」

「是非来てくださいよ！エヴァちゃんには一杯お世話になったから、サービスするよ。」

そして生活に足りてない物をチェックするヴァンプ。

「うん、少し買い出しすれば大丈夫かな？今日から住めそう。」

「・・・そうか。」

（ン？ゴ主人、モシカシテ寂シガッテンノカ・・・？）

「あ、エヴァちゃんはお昼まででしょ？」

「ん？まだだな。今日は茶々丸も準備できなかったと言っていたしな。」

「じゃあ、ワタシが作るよ。」

「いいのか？」

「うん、この厨房も使っておきたいしね。その代わり、買出しに付き合ってね？」

「それ位なら構わんど。」

「じゃあ早速行きましよう！」

戸締りをして、買出しに出るヴァンプ・エヴァ・チャチャゼロ。

「あ、茶々丸ちゃんに連絡しとかなきゃ。今は授業中かな？」

「あと少しで昼休みになる。その時に連絡すればよかるう。」

先に買出しを済ませ、茶々丸に連絡を取ったヴァンプ達は再び店に

帰ってきた。

そして早速調理を開始するヴァンプ。

「はい、お待たせ。エヴァちゃんが始めてのお客さんだね。」

そう言い、エヴァの座った席に出来上がった料理を運ぶヴァンプ。

「はい、炒飯と中華スープだよ。ゴメンねえ、簡単な物で。」

「構わん。美味ければ文句はない。お前の腕は知っているからな。」

「ありがと。」

「ところで、この店は何という名前にするんだ？」

「ん、フロシャイムは入りたい・・・かな？組織の名前だから愛着あるしね。」

「まあ、せいぜい潰さない様に頑張るんだな。ああ、学校が終わったらチャチャゼロを回収に来るからな。」

「じゃあそれまで預かっておきますね。」

「うむ。」

「ケケケ、頑張ッテオ勉強シテコイヨ？」

「煩いわ！」

「いつてらっしゃい！」

そして昼食を平らげたエヴァは学校に戻っていった。

その後、ヴァンプはチャチャゼロの話相手をしながら今日から住める様に準備を進めていくのであった。

「あ、レッドさんに知らせておかないと。」

ヴァンプはレッドに電話する。

プルルル・・・ガチャ

「あ、もしもし？レッドさん？ワタシワタシ！．．．え？オレオレ詐欺？違いますよぉー！ヴァンプです。．．．え？分かってる？もー！なら最初から．．．え？あ、用件？はいはい。学園長さんからですね、お店をお借りできました！ですので場所をお教えしてはいかがでしょうか。あ、そうですそうです。ワタシ達の住居も兼ねてますんで．．．、ええ。レッドさんもお昼まだでしたら一度こちらに来ていただけたら、はい。あ、場所はですね．．．。」

場所を伝え終え、電話も終わるヴァンプ。

「もー、あんなに怒鳴らなくてもいいのに．．．。」

「レッドガ来ンノカ？」

「うん、お昼食べに来るって。」

そして作業を再開するヴァンプ。

これが、後に麻帆良にて知る人ぞ知る隠れた名店『定食処フロシャイム』の小さな第一歩だった。



## F i g h t ・ 1 0 (後書き)

年内にもう一度更新できるかな？

感想・誤字脱字・指摘・意見お待ちしております！

## EXTRA・01（前書き）

皆様、今年はお世話になりました。

この様な駄作者の作品にお付き合いいただきまして感謝です。

来年も頑張つて更新していきたいと思うのでよろしくお願いします。

そしてなんとか間に合った！出来立てホヤホヤの年末特別編です！

いただいた感想で、他の怪人が見たいとの意見を何度かいただいたので出してみました。

過去最多登場人数の話になりました。

年始から本編再開となります！

## EXTRA・01

これはまだ、レッドとヴァンプがバイクでのトラブルに巻き込まれる前の話。

EX・01（番外編）

師走…、それはどんな人だろうと忙しく走り回るといふ時期。  
そんな師走の最後を飾る大晦日の出来事だった。

ここは世界制服を企む悪の組織『フロシャイム』川崎支部。  
その一室、作戦会議室。

「クツクツクツク…、揃っておるか？我がフロシャイムが誇る精鋭達よ……。」

そう呼び掛けるのは、古代ローマ兵の様な兜に紫のローブ、大きくFマークが入った盾に槍を持った人物―、ヴァンプ将軍である。

その呼び掛けに呼応するかの様に、数多の異形の戦士達が蠢く。  
その様子に満足したのか、大きく頷くヴァンプ。そのまま一体の怪人に話しかける。

「ゲイラス！各種交通機関への対応は！」

呼ばれたイカに翼の生えた怪人ゲイラスが答える。

「はっ！既に連絡を終え、押さえてあります！」

「うむ！モスキー！作戦を発動させる建築物の確保は！」

巨大な蛾の怪人が返事をする。

「はっ！そちらの手筈も整っております！」

「うむ！ナイトール！我らが宿敵、サンレッドの行動は把握しているな？」

元ヒーロー、ナイトールが敬礼する。

「はい！最も信用できる情報筋かよ子さんからスケジュールを聞き出し、完全に把握しています！」

「ククク、誠に頼りになる部下達よ……。作戦実行メンバーは各々、作戦準備を怠るでないぞ？」

「「「ははあっ！」「」」

「作戦名SKR！開始！」

散り散りになる怪人達。

それを見送ったヴァンプは呟く。

「ククククククク……、首を洗って待っているがいい！サンレッドよ……。」

某県某所とある温泉街にて

「わぁ、素敵な所じゃない」

「おお、悪くねえな。ただ・・・」

「喜んで貰えて何よりですよ！」

「コイツ等がいなけりやな・・・」

レッドとかよ子は温泉街に来ていた。

ヴァンプに川崎支部の慰安旅行面子に空気が出たので、無料だし一緒にどうか？と誘われたのだ。

「コラッ！アンタ！折角誘って頂いたのにそんな言い方しないの！」

「へへへ。」

「まあまあ、かよ子さん。あ！見えて来ましたよ！あの旅館です！」

ヴァンプが指を指している先に一軒の旅館。

周りの旅館と見比べても明らかに豪華さが違う。

「お、おい、ヴァンプ！ホントにあの旅館なのか！？マジで無料なんだろうな！」

「ええ、もちろんですよ。接待費で落ちますから。」

「アンタ、無料無料って恥ずかしいわよ？」

かよ子に後頭部をぺしりと叩かれるレッド。  
そうこうしている間に旅館に到着。

豪華な玄関口にて出迎えられる三人。

「予約してあるヴァンプといいますが。」

「遠路遙々、当旅館へようこそお出でくださいました！ささ、お疲れでしょう。早速お部屋までご案内させていただきます。」

係りの者に案内されて、客室に入る一行。

「スッゴイ！アンタ！凄い眺めよー！」

「おお、スゲエな・・・。」

「ありがとうございます。この風景は我が宿の自慢の一つでございます。夕食のお時間まではしばらくありますので、よろしければもう一つの自慢の露天風呂なぞご堪能いただければと思います。それでは。」

係りの者が退室する。

どうせ風景を堪能するなら露天風呂ということで二人は早速温泉に入りに入った。

「女湯」

「はぁ・・・、生き返るわぁ。景色もお湯も最高。しかも貸切状態なんて贅沢だわぁ。」

ご満悦なかよ子であった。

「あの人も堪能してるかしら？」

「男湯」

「ああ・・・、生き返るぜ・・・。」

レッドも命の洗濯の真っ最中であった。

「ええ、ホントに。」

なぜか真横にヴァンプもいるが・・・。

「なんで真隣に来んだよ・・・。」

「いゝじゃないですか。若い子達はワタシがいたらくつろげないかなって。」

「知るかつ!!」

二人の空気が危つくなってきたのを察した戦闘員1号2号が仲裁に入り、事なきを得る。

そして夕食。

係りに案内されたレッドとかよ子は大広間に案内される。

そこにはフロシャイム川崎支部の主な面子が集まっていた。

「あゝっ！遅いよレッド！！ブツ殺すよぉー！」

「レッド、コロチュ！」

「げ、ウサ公かよ・・・。」

いきなり物騒なことを言い放つぬいぐるみ型怪人のウサコツとヘルウルフ。

「コラコラ、ウサコツツにヘルウルフ。もうすぐご飯だから座ってなさい。」

「う・・・、わかりましたあゝ。」

しょんぼりとするウサコツツにかよ子が話しかける。

「ウサちゃん、私の隣に座る？」

「え！いいんですか！？」

落ち込みから一転、ご機嫌のウサコツツ。

そんなこんなで、場が落ち着いたのでヴァンプが宴会開始の音戸を取る為に出る。

「えゝ、今年一年お疲れ様、皆。今日は無礼講だから。でもかよ子さんとレッドさんには迷惑を掛けないようにね！」

「はい！」と周りが返事を返す。

「それじゃあ、大いに騒いで英気を養ってね！来年こそ、サンレッドをぶつ殺そうねゝ！」

「そーいうのは本人のいない所で言えよ……。」

「乾杯！！」

「ゝゝゝかんぱゝい！！ゝゝゝ」

そんなレッドの喧きは乾杯の音頭でかき消された。

ゝメダリオ・カーメンマン・ウサコツツ組ゝ

「浴衣姿のかよ子さん、レベル高えゝ！！」

「あんまジロジロ見てんじゃねゝぞ。レッドに殴られても知んねゝぞ。」

「そつだよ！かよ子さんをイヤラシイ目で見たら、ぶつ殺すよおゝ！！」

顔を赤らめるメダリオに突っ込むカーメンマン。



かよ子を守る為、奮起するウサコツツ。

くアントキラ・モギラ・モゲラく

「あ、美味い。」

「あ、ホントだ。いやあ、美味しいツスね。アントキラさん。」

「『美味しいツスね。』じゃねよお。実際、美味えんだよ（笑）」

のんびり料理に舌鼓をうつ。

くアーマータイガー・ヨロイジシ・デビルネコく

「美味しいね。あ、これとこれは食べられないから二人にあげるね？ボク、通風で止められてるから・・・。」

「ネコ君、また身体が・・・わかった！こっちから好きなを取ってくれ！」

「うむ、こちらからも取っていいでゴザルよ？」

「アリガト、アーマータイガー、ヨロイジシ。」

デビルネコの世知辛い食事制限をフォローするタイガーとヨロイジシ。

くギョウ・ガメス・ゲイラスく

「はっ！！温泉宿で合コン！？アリじゃない？ガメス？」

「こんな時位、合コンは忘れましようよ、ギョウさん。」

「ムリムリ、ギョウは集団お見合い（笑）が大好きだから。」

新しい合コンの形を模索するギョウに呆れる二人。

「モスキー・ナイトール」

「今回の慰安旅行、マジパネエ！超極楽じゃね？」

「ホント凄いですね！あ、ヴァンプ様にお酌とかしに行った方がいいですね？」

「お？行っちゃう？いいね！俺も行くし？」

後輩としてお酌しに行こうと立ち上がるナイトールとモスキー。

「レッド・かよ子」

「ほらアンタ、乾杯。」

「おう。」

（アイツ……あとで一発ぶん殴るか……。）  
メダリオ

二人は周りの喧騒を眺めながら乾杯する。

レッドがそんなことを考えてると……

「せんぱい！飲んでますか？」

ナイトールがやって来た。

「んだよ……ナイトマン？」

「もー！ナイトールですってば！ささ、まずは一杯。」

ビールを注ぐナイトール。

「お、悪いな。」

「それじゃあ、僕は他の先輩方にお酌してきますんで！」

立ち去るナイトール。

その後、次々にお酌に来る怪人たち。

宴会も大いに盛り上がって来た辺りで、除夜の鐘をBGMに年越しを迎えた。

ほろ酔いのヴァンプが前に出て深々と皆に頭を下げる。

「あけましておめでとうございます。」

「「「あけましておめでとうございます!!!」」」

新年の挨拶を皮切りに、更に盛り上がる宴会。

「アンタ、悪いけど先に寝るわね？」

「おうよ。」

流石に疲れたかよ子が先に退室する。

それを見た怪人たちが一斉に挨拶する。

「「「かよ子さん！お疲れ様でっす!!!」」」

今、この場においてヴァンプの次に慕われているかよ子だった。  
そして・・・、皆の良心かよ子が居なくなっただけで場が動き出す。

「あ、皆さん折角ですし近くの神社まで参拝しませんか？屋台も出てるらしいですよ？」

戦闘員1号が提案し、大半の面子が賛同。

（アニマルソルジャーとヴァンプはオネムの為、不参加。）

所変わって、近所の神社。

皆、思い思いに屋台のメニューと甘酒や熱燗等を堪能していた。

「よお、ギョウ。こんなところでナンパか？マメだねえ。」

「あ、レッドさん。止められないんツスよね。」

「皆さん、この先に初日の出の絶景スポットがあるらしいんで、移動しますよ。」

戦闘員の号令で皆ダラダラと移動する。

そこは人気のない広場だった。

「あん？なんだあ？こんな所が穴場なのか？」

「・・・クツクツクツク。」

薄暗い広場に笑い声が響き渡る。

「・・・？この声はヴァンプ・・・？」

茂みから、酔いつぶれて宿で寝ているはずのヴァンプが姿を現す。  
気がつけば周りの怪人達の姿が見えない。

「温泉は堪能したか？料理は美味かったか？・・・ククク、それらは全て警戒心を失くす罠よ・・・。まんまとハマっておったな？」  
「テメエ・・・。わざわざそんだけの為にここまで手の込んだことやったのかよ。」

「いや、日ごろ二人には世話になっているからな。ほんのささやかな気持ちという奴よ。」

どんな時でも感謝の気持ちを忘れないヴァンプ（笑）

「ムダ話はここまでよ・・・。さあ！出でよ！！フロシャイムの精鋭達よ！！」

ザザザッ！！

号令に従い、数多の怪人達が現れる。

「これから登る初日の出とは逆に沈むがいい！！サンレッドオツ！！」

ここに『血染めの元旦』と呼ばれる大虐殺が幕を開けた・・・。

「はあ、いい旅行だったわ。またヴァンプさんにお礼言っとかないとねえ。」

ご機嫌なかよ子。

レッドとかよ子、二人は既に帰宅していた。

「・・・言わなくていいよ。」

かよ子とは対照的に不機嫌なレッド。

しかし、二人の正月はのんびりとしたものとなった。

「ううう・・・、皆大丈夫・・・？」

「イテエ・・・。」

ヴァンプの周りは痛みに蹲っている怪人達で埋め尽くされていた。  
その光景は正に死屍累々。

ヴァンプの正月は皆の看病で終わるのだった・・・。

## EXTRA・01（後書き）

今回はいつにもまして、急遽作り上げてますので誤字脱字等ありましたらお気軽にご報告くださいませ。

それでは皆様、あと僅かではありますがよいお年を！！  
そして、新年もヨロシクお願いします！！

## F i g h t . 1 1 (前書き)

些か遅い気もしますが、皆様明けましておめでとうございます！  
お待たせしました！新年一発目の更新となります！

相も変わらず、時間経過の遅い亀小説ですが、今年もよろしく願  
いいたします！

それではどうぞ！



## F i g h t . 1 1

二日酔いでダウンした面々。

それでもレッドは広域指導員の仕事に。

エヴァはチャチャゼロの妨害にも負けず、登校する。

ヴァンプは学園長に呼び出される。

そして、ついに自分の店を手に入れたヴァンプは着々と準備を進める。

## - F i g h t . 1 1 -

ヴァンプが店を手に入れた同日。

一番最初にエヴァの家を出たレッド。

タカミチと合流して広域指導員の仕事を始める。

「あー、やっぱり飲みすぎたか・・・。」

「ハハハ、僕も久々に楽しいお酒だったよ。イタタ・・・。」

二日酔いの辛さを隠しつつ、広域指導員の仕事に来てるレッドとタカミチ。

「エヴァ達は大丈夫かな？」

「茶々丸がいるから大丈夫だとは思ってたがなー。」

「まさか、エヴァがあんなに飲むとはね・・・。」

「全くだ。ヴァンプのヤツも弱えんだから、あんなに飲むんじゃないっつーの。」

そんな他愛のない会話の二人の周りには、空手着・柔道着・剣道着等様々な武道系サークルの面々が倒れ伏している。しかし、これをやったのは彼らではない。

「ハイーツ!!」

甲高い掛け声が響く度に人が宙を舞う。

「あの女子、スゲエじゃないか。」

「ああ、僕のクラスの古菲君だね。このあいだの格闘大会で優勝しちゃったからね。挑戦者が後を絶たなくてね。」

「ほー。」

最後の挑戦者が倒れた所でタカミチが古菲に話しかける。その間、レッドは生きる屍達を通路脇に片付ける。

「相変わらずだねー、古菲君。」

「アイヤ！高畑先生力！オハヨーネ。」

「おーい、タカミチ。終わったぜ。」

「あ、悪いねえ。古菲君、こっちは新しい指導員のレッドさん。」

「おお、見事に赤いアルな。古菲言っネ、ヨロシクアル!」

「おう、まあヨロシク頼むわ。」

「ムムム、レッドサンも強いアルね?」

「あん?」

「古菲君?」

不穏な空気を感じるレッドとタカミチ。ニヤリと古菲。

バオチユアン  
「炮拳！！」

「お？」

ドン！！

鳩尾目掛けてのストレートを古菲が繰り出す！

レッドは避けない。レッドの鳩尾に古菲の拳が突き刺さる。

ズン！！

回避か迎撃されると思っていた古菲はがっかりする。・・・が！！

「アレ？拍子抜けアル？・・・ツ！？そんなっ！？」

良く見ると、不意打ちにも係わらず拳はヒットしていなかった。しかも、自分の拳はがっしりと掴まれていた。

抜け出そうにも万力の様に締め付けられてビクともしない！！

「お仕置きだ、チャイナ娘。」

レッドはそう言い、古菲のおでこにデコピンを構える。

只のデコピンにかつてない悪寒が走る！

（マズイ！マズイ！マズイ！）

しかし、逃げられない！！

どれだけ足掻こうが、腕を封じられ、体勢を変えられない以上、対した抵抗は出来ない。

とうとうレッドのデコピンが炸裂。

パン！！

「~~~~~ツツツ！！！！痛いアル~~~~ツツツ！！！！」

涙目でのたうち回り、おでこを押さえる古菲。

「ううう、ワタシの硬気孔を抜けてここまで痛いなんて信じられないアル……」

「チャンピオンが不意打ちなんかしてんじゃねーよ。負かした奴にも失礼だぜ？」

おでこを摩りながら起き上がる古菲。

「レッドサンの言う通りアル。申し訳なかったアル。」

素直に自分の非を認めて謝罪する。

「さ、古菲君。そろそろ学校に行かないと遅刻だよ？補習は嫌だろ？」

「……！！補習は嫌アル！！それじゃもう行くネ！！レッドサン！今度は正々堂々手合わせするアルよー！！」

そう言いながら、古菲は走り去って行った。

「元気だなあ……、チャイナ娘は。」

「二日酔いの僕達とは大違いだね。」

「違いねえわ。」

苦笑する二人は、今朝のパトロールを再開した。

「あ、そうそう。今日は他の広域指導員の人達との顔合わせするから。」

「ん？顔合わせならしたじゃねーか？」

「あれは裏の関係者。今回は一般の指導員だよ。」

「ああ、そーゆーことが。」

その後、通学路の巡回を続け、レクチャーを受けるレッド。

「しかし、ホント馬鹿デカいよなあ。この学園……。」

「まあね、ここまでの規模は世界でも稀かな？」

「だよなー。アイツとか、スゲー迷子になりそうだな……。」

レッドは「迷子になってしまいました〜！レッドさ〜ん！助けてくださ〜い〜！」と縋ってくるヴァンプを容易に想像出来た。

「ハハハ、有り得るかもね？つと、僕はそろそろ戻るね。顔合わせは三時からだから、それまではパトロール兼散策でもしてると思います。その指導員の腕章さえしてれば大抵の所には行けるから。」

「おう、まあブラブラしてるわ。」

「それじゃ。」

時計を確認して慌てるタカミチ。彼はクラス担任も兼任しているの  
で、自分のクラスのHRをしなければならない為、急いで戻った。

独りになったレッドはどうするか悩みながら散策を開始する。

「広すぎて何処に行くかも悩むな……。」

あてもなく歩いている時、交差点に差し掛かる。  
すると園児が泣きながら一人で歩いているのが見えた。

「あん？何だつて一人でうろついてんだ？危ねえだろ……。」「

そうして見ている内に、園児はフラフラと横断歩道を歩き始めた。  
しかし、歩行者信号は『赤』。そして運悪く一台の車が交差点に差し掛かる。

運転手は携帯を弄っており、園児に気づいた様子がない。

「おいおい……。」「

このままでは確実に事故が起きる！

あと数mという所でようやく運転手が進路上の園児に気づく。

慌ててブレーキを掛けるが到底間に合わない！

キキイイッツッ！！

けたたましいブレーキ音に驚き足が竦んでしまう園児。

「……。ちいっ！！」

ドンッ！！

石畳に足跡を残すほどの踏み込み！！

それにより得られた爆発的な推進力により接触直前の園児を引っ掴む。

そのままの勢いで反対側の歩道に着地するレッド。  
遅れて停止する車。

「危ねえなあ、ギリギリだったぜ・・・。」

車はそのまま逃げ去ってしまった。

「ゴラアッ！！危ねえだろうが！！気をつけろっ！！・・・ったく。  
おい、坊主。大丈夫か？怪我ねーか？」

「ヒック、うえっ、うう・・・。」（コクリ）

泣きながら頷く園児。

「んで？どうして独りなんだ、坊主。」

頭をやや乱暴に撫でながら事情を聞くレッド。

泣きながらなので、要点を聞き出すのにやや時間がかかったが、要約すると皆で外に遊びに行く途中で先生達と逸れてしまい、心細くなってフラフラ歩き回ったら余計迷子になった・・・との事。

「あー、そりゃ怖かったな、坊主。けどな、もう大丈夫だ。俺が幼稚園に連れて帰ってやつからな。」

「え・・・？うん！！」

それから園児の帽子に書いてあった幼稚園の名前を近所の案内板で探し出す。

「あー、結構遠いな・・・。坊主、まだ歩けるか？」

「うん、がんばる！！」

「そうか、坊主は強いな。」

「えへへへへ。」

しばらく歩いていると園児がレッドの顔を興味深々に見ながら尋ね

てきた。

「ねえ！おじちゃんはヒーローなの？」

「ん？おお、そうだぜ！正義の味方ってヤツだ。」

レッドの一言にテンションがあがる園児。

「スゴいスゴい！本物のヒーローだ！」

「そんな走り回ると危ねーぞ？って言わんこっちゃねえ。」

走り回る園児に注意を促すも遅かった様で、転けてしまう園児。

ステン。

「うつ・・・、うええ・・・。」

泣く寸前の園児。

「しゃーねーなあー。」

ひょいっと園児を担ぎ上げ肩車してやるレッド。

「泣くんじゃねえよ。坊主は強えんだろ？」

「グスツ・・・、うん・・・。」

そのまま肩車で幼稚園に向かうレッド。

目的の幼稚園まであと少しといった所で・・・

「あ！先生だ！おい！」

「お？」



「ああ！正男君！よかった！広域指導員の方、ありがとうございます！  
すー！」

レッドの腕章を見た幼稚園の先生。

「通りの交差点で迷子になってたから連れて来た。」

「本当にありがとうございます！」

「坊主、もう迷子になんじゃねーぞ？」

「うん！ありがとー！ヒーローのおじちゃん！」

園児の正面にしゃがみ込み、頭をワシワシと撫でながら園児に言う。

「俺の名前はな？天体戦士サンレッドっつーんだ。」

「さんれっど……。」

「おう！じゃあな。」

「うん、レッドのおじちゃん！」

立ち上がり、立ち去るレッド。その後ろ姿にブンブンと手を振る園児。

振り返らず、背中越しにヒラヒラと手を振るレッド。

園児と別れてしばらくすると……、

ブルルルル……

「ん？電話か？」

不慣れな手つきで電話に出るレッド。

「もしもし……？」

『あ、もしもし？レッドさん？ワタシワタシ！』

「ワタシワタシって、オレオレ詐欺かつーの！」

『え？オレオレ詐欺？違いますよぉー！ヴァンプです。』

「んな事あ分かってんだよー！ブン殴るぞー！」

『え？分かつてる？もー！なら最初から……。』

「んで？用件は何だ……。？」

『え？あ、用件？はいはい。学園長さんからですね、お店をお借り  
することができました！ですので場所をお教えしておこうかと。』

「そうか、んで？俺等の住処の方はどうなったんだ？店に住めん  
か？」

『あ、そうですそうです。ワタシ達の住居も兼ねてますんで……。  
ええ。』

「わかった。そんだけなら切るぞ？」

『あ、レッドさんもお昼まだでしたら一度こちらに来ていただけた  
ら、はい。』

「おお、じゃあ丁度いいからそっち行くわ。で、場所どこよ？」

『あ、場所はですね……。』

そうしてレッドはヴァンプの店に足を向ける。

「ここか……。？」

レッドは改装したての一軒の店の前に来ていた。

「ああ、ここだわ。」

間違えようがない。なぜならドアの所に殺人人形がぶら下げられて  
いた。

「よう、チャチャゼロ。何やってんだ・・・？」

「ヨオ、レッド。イラッシャイマセ？」

まさか殺人人形に接客される日が来ようとは思わなかったレッド。  
レッドはチャチャゼロを降ろしてやり、共に店に入った。

「うーっす。」

「あ、いらっしやい。レッドさん。」

片付け作業を中断して出てきたヴァンプ。

「昼飯食いに来たぜ。」

「ケケケ、一名様ゴ案内。」

昼食を摂りながら、ヴァンプからの説明を受けるレッド。  
今日から住める事、店の名前などなど。

「んじゃあ、今日からここに帰って来ればいいんだな。」

「そうです。」

「ごっそさん。んじゃあ行ってくるわ。指導員の集会があんだと。」

「わかりました。」あ、これがここの鍵です。裏から入れますんで

「

「おう、じゃくな。」

そう言い、レッドは出て行った。

その後ろ姿を見ていたヴァンプはどことなく嬉しそうであった。

そのまま、鼻歌まじりに作業を再開するヴァンプ。

「ナンダ？ゴ機嫌ジャネーカ？」

「え？そう？そんなことないよ。」

ヴァンプは嬉しかった。正義の味方広域指導員の仕事に真摯に取り組むレッドが。

所変わって、広域指導員の寄り合いに顔を出したレッド。

現在、タカミチが他の指導員にレッドを紹介しているところだ。

「・・・というわけで、こちらのレッドさんがこの度、広域指導員に任命されました。僕と同じで、荒事の担当をメインに考えてますので、荒事の対処への増援等、僕がいないときは彼にお願いします。」

打ち合わせも終わり、解散となって直ぐにレッドの元にタカミチが一人の男性を連れてきた。

「レッド、こちらは新田先生。僕が知る中で最も立派な教師です。指導員の仕事で分らないことがあったら彼に聞いてください。」

「高畑先生、そんなにおだてないでください。」

タカミチが連れてきた男性の紹介を行う。

ベテランの雰囲気を滲ませる壮年の男性はタカミチからレッドに向き直る。

「どうも、新田と言います。」

「どうもっす。う、内田と言います。レッドと呼んでくれたらいいんで。」

未だ自分を内田と言うのに若干の抵抗を感じる為、レッドと呼んで貰おうとするレッド。

「ほう、レッド？」

「見たまんまでしょう？」

「え、ええ。その覆面はお脱ぎにならないので？」

「ええ、学園長の爺さんにも許可はとってあるんで。」

「ふむ…。」

新田はそれ以上の詮索はしなかった。

その日は本格的に広域指導員の仕事のレクチャーや緒注意を受けて解散の運びとなった。

そして会議室を出ようとした所でタカミチに呼び止められる。

「あ、レッド！」

「ん？」

「さつき、ある幼稚園から感謝の電話があつたよ。また顔を出して下さいってさ。お手柄じゃないか。」

「…よせよ。」

照れるレッド。

ニコニコしていたタカミチだが、表情が引き締まる。

「あ、今晚空けておいてくれよ？警備の仕事だから。」

「了解。」

そして今度こそ帰路に着くレッド。

とうとう、警備員としての初仕事。  
果たしてレッドは、魔法使い達から信頼を得られるのか？

## F i g h t ・ 1 1 (後書き)

誤字脱字はお気軽に教えてください！

## F i g h t . 1 2 (前書き)

この話辺りからちらほら独自解釈が開始めます。あまり無茶苦茶にならないように気をつけているつもりです。

それではどうぞ！



## F i g h t ・ 1 2

広域指導員の仕事にやりがいを感じ、仕事をこなすレッド。  
今後の拠点となるヴァンプの店を訪れ、昼飯を摂る。

その後、他の指導員の面々との顔合わせを済ませた際にタカミチに  
告げられる。

「今晚、警備があるから。」と・・・。

（ F i g h t ・ 1 2 ）

草木も眠る丑三つ刻・・・。

静まり返る夜空を満月が照らす。

普段人気のない麻帆良学園都市を囲む森。

鬱蒼と生い茂る木々の間を疾走する幾多の影があつた。

しかし、その影達は一つとして人の形をしていなかった。

異形・・・、様々な虫や鳥、獣の形をした妖や大小様々な鬼達が麻  
帆良中央部に向けて侵攻を開始する。

深夜、それは麻帆良がもう一つの顔を見せる時間帯でもあつた。

麻帆良に敵対する者は多い。

図書館島という、世界規模の巨大図書館の希少本か、地下の遺跡を狙った盗掘者。

『<sup>世界樹</sup>神木・蟠桃』の魔力に惹かれて集まって来る妖魔達。  
そして、最も多いのが関西の魔法使い達。

ここ麻帆良学園都市は西洋魔法使い達の組織、関東魔法協会のお膝元であるが故に、協会に反感を持つ日本古来の魔法組織『関西呪術協会』の者達からの襲撃が絶えることはなかった。

今回の異形たちも関西の呪術士達の召喚による襲撃だった。

麻帆良に近い山の一角。巧妙に偽装し、認識障害結界を使用し、隠れている陰陽師の集団がいた。

今回は大規模召喚による、圧倒的物量での同時侵攻。敵の防衛戦力を上回る数で叩き潰す！

その為に、普段の数倍の術士を用意した。

しかし、その大量の術士達も限界寸前までの大規模召喚の後のため、皆息も絶え絶えの様だ。

その集団の中で唯一、余裕のある初老の男性が声をあげる。

「ククク、ここまでの数を揃えたのだ！！今回こそ憎き西洋魔法使い達を殲滅するのだ！！」

意気高揚している初老の男性に召喚した異形達から念話が入る。

『今回はエライ頑張ったのお。ここまでの大規模召喚は久し振りやで？』

『旦那も毎回毎回好きやなあ〜。』

『まあ命令やから、ちゃんと仕事はやるけどな？』

『さつきも敵の斥候、追い払ったとこやしな。』  
『ほな、ムダ話はそのへんにしといて行こか。』

異形達が念話を切り、更に移動を開始する。

『見えたで！つり橋や！あつこから一気に侵攻すんで！』  
『『『応っ！！』』』

異形達の集団は麻帆良大橋と呼ばれる大きな橋に差し掛かる。

『ん？誰ぞ居んで？』

集団の先頭が橋の中腹に到達した頃、異形の一体が敵を発見する。

『なんや・・・？赤いのと白いのん、人間が二人おるわ。』  
『はっ！！たった二人？上等やんけ！このまま突破したるわっ！』

異形の集団が二人を目標に定め、殺気を漲らせる。  
リーダー格の号令を待つ。

『殺せっ！！！』

号令と共に殺到する異形達。

『おおおおおっっっ！！！』

二人に対し、圧倒的なまでの数の暴力。

その暴威は簡単に二人を飲み込むかにみえた。

しかし、その数の暴力が二人に届くことはなかった。

ボンッ！！

闇夜に10m程の太陽が顕現する。

集団は足を止めてしまふ。それが過ちだと知らずに。

しかし、それも当然と言えるだろう。夜にいきなり目前に太陽が出現したのだから。

しかもその太陽はかなりのスピードでこちらに向かってきた。

『は？』

『なんじゃああああ！？』

『逃げろおおおっつ！？』

ズ・・・ドオオン・・・。

オオオオオ・・・。

太陽が集団の先頭に着弾、爆発炎上を起こす。

『ぎゃああああああっつ！！！！？？』

避けることの出来なかった大半の妖達が消失してしまった。

数の暴力は、もつと純然たる暴力・・・『火力』に蹂躪されたのだつた。

時間は少し遡る。

麻帆良の『夜の警備』とは、学園にいる魔法関係者によって行われる。

そこにレッドも加わることになっている。

今回もいつも通りということで特別な通達はしなかった。

「では、今日も頼んだぞい！くれぐれも無茶はせんようにの！」

その言葉により散開する各人。

「爺さん、俺はどーすりゃいいんだ？」

皆が散って行くのを見計らい、レッドは学園長に話しかける。

「おお、レッド殿はその腕を見込んでタカミチ君と激戦区を頼みたいんじゃが、構わんかの？」

「ん、別に構わんぜ？」

「じゃあ行こうか、レッド。」

レッド達が配備されたのは、麻帆良大橋。

大橋は麻帆良と外を陸路で繋ぐ唯一の場所。

故に侵攻の際には敵の主力がここを通ることになる。

激戦区に配置された他の面々が発する緊張した空気の中、自然体のレッドとタカミチの二人はリラックスしたものだっただ。

タバコを取り出したタカミチがレッドに問う。

「吸うかい？」

「お、悪いな。貰うわ。」

一服するレッドとタカミチ。

紫煙を吐き出しつつ、タカミチに問うレッド。

「ふう。しかし・・・、そんなにしょっちゅう敵が来んのかよ？」

「うん、ここには貴重な物もいっぱいあるからね。」

「ふん・・・。」

タカミチから襲撃の背景の説明を軽く聞いていると、周囲が慌しくなってきた。

前方から見回りしていた魔法先生達が帰って来た様だ。

彼らは皆、多少の負傷をしている。

その内の一人がタカミチの前まで来て、息を荒げたまま報告を行う。

「高畑先生！！ハアハアツ・・・！敵がっ！！大勢の敵が迫って来るっ！！」

ザワツ！

周囲が一気に緊張を高める。

「落ち着いて！！各員迎撃体勢を整えて！！非戦闘要員は負傷者を連れて下がって！レッド！前に出るよ！」

タカミチがタバコを携帯灰皿に捨てながら冷静に指示を出す。

「ハ、ハイッ！！」

「あいよ。」

浮き足だってしまった周りが落ち着く時間を稼ぐため、このエリアの最高戦力を前線に出す。

丁度その頃、橋の反対側に異形の大軍が姿を見せた。

「えらい団体のお客さんだな？」

「うん、ここまでののはそうそうあるもんじゃないよ……。」

「初勤務だつてえのによぉ……。」

「でも、レッドがいてくれる日で良かった。これは結構厳しい事になりそうだ……！」

「おい……、結構派手にやってもいいんだつたな？」

「ん？ いいけど、あまり橋は壊さないでくれよ？」

「りょーかい。派手な狼煙を上げてやる……よつとぉ……！」

そう言い放ち、身体を腰溜めに両手を上に挙げ構える。

「コロナ・アタック……！」

ボンッ！！

両の手の間に10m程の巨大な火の玉が生み出される。

それは最早、小型の太陽だった。

それをレッドは無造作に投げつける。

「オラアッ……！」

ズ……ドォォン……。

「凄いな、レッド……。今の火の玉、『燃える天空』位あつたんじゃないかい？」

「伊達に太陽の戦士を名乗ってねーよ。それより今の内に他所と連

絡しとけ。何かキナ臭え……。」

「わかった。すこしこの場は頼んだよ。」

「おうよ。」

連絡の為、タカミチが少し下がる。

代わりにレッドは前に出る。

「おーおー、化け物のオンパレードかよ。」

目前に広がる異形の群れに対し、皮肉な笑みを浮かべるレッド。  
電話を終えたタカミチがレッドに叫ぶ。

「レッド！君の言う通りだ！他も敵が大群で攻め寄せて来てるみたいだ！！ここに戦力を集中してるから、他が戦力不足になってるみたいだ！」

「・・・ちっ！タカミチ！ここはいい！最低限残して、連れてって救援に回れ！」

「しかし！」

レッドの提案に渋るタカミチ。

「いいから行け！先刻から俺の耳に悲鳴が聞こえっ放しなんだよ！」  
レッドイヤ

「・・・っ！？わかった！無理はしないでくれよ！！」

しばらくして大多数の魔法使い達がタカミチの指示に従い、離脱していく。

逆にレッドは一度残った味方の元に戻った。

10人程度しか残っていない味方。

レッドは動揺の残る味方達に語る。



「聞いた通りだ！他もヤベエ状況だ！新参者の俺の言うこと聞くのは抵抗あるだろうが、ここは従ってくれ！」

橋の方に視線を戻すと、異形の集団にも体制を整えつつあった。レッドは近くの魔法使いに問いかける。

「ちい……。なあ、魔法使いってのは色々撃ったり、結界つてのを張ったり出来んだろ？」

「……。あ、ああ。」

「その結界つてので橋以外から敵が進めない様にしてくれ。出来るか？」

「それ位ならこの人数でも出来るだろう。……。任せてくれ。」

「頼んだ結界つてのは何人で張れる？」

「侵入を拒むだけの結界なら5〜6人位だ。」

「じゃあ結界つてのを張るのに7人、得意な奴を選んでくれ。後の3人は空を飛ぶ奴を迎撃してくれ。倒す必要はねえ。後は俺がやる。」

「

「だ、大丈夫なのか？」

「心配すんな。そっちも頼んだぜ。」

そう言い、背を向けて橋に向かう。

残された魔法使い達は黙って進んでいくレッドの背中に頼もしさを感じた……。

「よし！こちら準備にかかれ！」

橋の中腹、異形の集団の手前まで進むレッド。

背後で結界が起動するのを感じつつ、足を止める。

「待たせたな、オメー等。悪いがこっから先は通行止めだ。」

『ナンや？兄ちゃん、一人かい？』

「おお。お前え等位、俺一人で充分だろ？」

『ああ？上等やないかい、ワレエ……。』

「いいか、オメー等。死にてえ奴だけ……。かかって来おいっ！」

レッドのあげる気炎に怯む異形達。

『何ビビつとんねん！相手は一人やぞ！！』

『『『『オオオオオツツツ』』』』

リーダー格の鬼が仲間が発破を掛ける。その発破と共に一斉に仕掛ける異形達。

様々な種類の異形が、己の誇る牙で爪で武器でレッドを殺そうと殺到する！！

様々な攻撃が空気を切り裂きながらレッドに迫る！！  
それに対し、レッドはたった二握りの拳で相対する。

レッドに覆い被さる異形達。

「オラオラオラオラアアアツツツ！！！！」

ゴンツゴガゴガゴガンツツ！！

それを真正面から殴り飛ばす！

『『『ガアアアアツ！？』』』

次々と還されていく異形達。

『アホな！？何の魔力もないブン殴りでワイ等を還すやおっ！？』  
驚愕するリーダー格の異形。

「どうした？こっちは忙しいんだ。どんどん来いやあ！」「リアッ！  
」

レッドと異形達の死闘が今！幕を開ける！

一方、戦線を離脱したタカミチは人員を各地に援軍として送りつつ、  
自身も瞬動を繰り返し激戦区を援護に向かう。

ザシュツ！

瞬動を終え、このエリアの指揮官である黒人男性に話かける。

「ガンドルフィーニ先生！戦況はっ！？」

「高畑先生っ！？大橋を担当されてた筈ではっ！？」

「そこはレッドが1人で抑えています！それよりここの戦況を！」

「彼が1人で！？・・・あ、いや、そうだな。こちらも普段では考えられない位の質と量の敵が襲ってきたんだ。学生達を後方支援に回し、我々が前線で踏ん張っていたんだが、徐々に学生達がダウンしてしまい、防衛と牽制で手一杯になっている。」

「敵の増援は？」

「今のところ確認されていないが・・・。」

「わかりました！すぐに迎撃に入ります！！こっちも急いでるんでね！左手に魔力！右手に気！合成！！」

カツ！！キキキキキ・・・ッ！！

そう言い放ち、タカミチは威掛法を発動させる。  
そのままポケットに両手を入れ、腰溜めに構える。

「豪殺！居合い拳っ！！」

ドゴンッ！！

異形の集団の真ん中に穴が開く。  
それだけでは終わらない。

「ふっ！」

パパパパパパン・・・！！  
ドゴンッ！！

居合い拳で散り散りになった異形達を牽制しつつ、一箇所に集めていく。

異形達が密集した所に再度、豪殺居合い拳を叩き込む！  
その様は正に絨毯爆撃！打ち出された拳圧が無慈悲に異形を還していく。

煙が晴れると、大きなクレーターが残るのみ。

「流石は高畑先生だ！AAAの『悠久の風』だ！」  
「なんて強さだ・・・。」

「これが『<sup>アラルブラ</sup>赤き翼』の英雄だ!!」

タカミチの強さに湧き上がる周囲。  
そんな周囲に忠告する。

「油断しないで!周囲を索敵と警戒を!」

周囲の索敵を終え、敵影がないことを確認したタカミチはガンドルフイーニに話かける。

「先生!僕は次の救援に行かないといけないので、事後処理をお任せます!」

「ああ・・・!後は我々で!力になれなくてすまない!」

「いえ!それでは!」

ザシュツ!!

瞬動でその場を離れるタカミチ。

(クソッ!ここまで大規模な襲撃だったなんて!レッドは大丈夫なのかっ!?)

未だ少数で橋を押さえているであろうレッドを案じる。

しかし、救援を求めているエリアが数多くあり、レッドの元に向かうことは許されない。

そんな不安と焦りに駆られながら、タカミチは次のエリアへの救援に向かう為、更に脚に力を籠める!

(僕が戻るまで、無事でいてくれよ!レッド!!)

麻帆良学園の英雄は闇夜をひたすらに疾走する。

異形の闇が麻帆良と太陽を覆う。

## F i g h t ・ 1 2 (後書き)

誤字脱字、ご意見突っ込み等、お気軽に感想まで。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0215y/>

---

ネギま！太陽の戦士

2012年1月14日19時54分発行